

日本写真家協会会報

NO.179
(2023. Mar.)

■焦点「写真家の役割、写真の力」

■第16回 JPS フォトフォーラム「自然と命を撮るということ」

■第17回「名取洋之助写真賞」受賞者決まる

JPS



Photo Noda Tomoaki



photo: 西野嘉憲 / Yoshinori Nishino / HJPI320110002878

2022 年第 5 回「笹本恒子写真賞」受賞作品 / 漁場に向かう石垣島の海人

YOU ARE A COPYRIGHT OWNER

あなたが写真を撮った瞬間に、写真の著作権はあなたの財産となります。

そのために何の登録も必要としません。

あなたの写真は、著作権というとても強い権利で、あなたの死後 70 年に渡って守られます。

しかし、著作権を譲渡する契約が交わされた写真は、その権利を失い、回復することは困難です。

写真家はでき得る限り、「写真の著作権を保持するべきである」と私たちは考えます。

写真著作権を大切に。



<https://jpca.gr.jp>

一般社団法人 日本写真著作権協会

〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCII ビル 403

【会員団体】 公益社団法人日本写真家協会
公益社団法人日本広告写真家協会
一般社団法人日本写真文化協会
日本肖像写真家協会
一般社団法人日本写真作家協会
全日本写真連盟

一般社団法人日本スポーツプレス協会
一般社団法人日本自然科学写真協会
日本風景写真協会
公益社団法人日本写真協会
一般社団法人日本スポーツ写真協会

HCLファインアートプリントサービス



ILFORD
CERTIFIED PRINTER PARTNER

イルフォード 認定ラボ

作品を極限まで表現した「ファインアート・プリント」を国内外有数のアーティスト用紙でご提供します。
ファインアートプリントの高い技術と知識を有する熟練のプリンティングディレクターが作品制作をサポートします。



ハーネミュレ ファインアート バライタ

深い色合い、上質な光沢と質感、広い色再現域、高い最大濃度と滑らかなグレーの階調表現で、特にモノクロ写真に最適です。



ハーネミュレ フォトラグ

精細で滑らかな面質により多目的に使い、モノクロとカラー写真のどちらにも適し、深みを感じる絵画的な作品に仕上がります。



伊勢和紙 芭蕉

滑面と粗面があり、制作意図に応じてどちらの面でもプリントが可能で違った風合いを表現できます。

〈写真は全てイメージです。〉

このほかにも条件により各種ファインアートペーパー出力の対応が可能ですのでご相談ください。

■ フォトイメージングセンター

営業課 フォトアート担当
東京都杉並区和田1-6-7
☎(03)3384-9670

■ 大阪営業部

営業課
大阪府大阪市北区万歳町3-17
☎(06)6313-2351

サービスの詳細はこちら▶
WEBからも注文できます！



株式会社 **堀内カラー**

■ Gallery	JPS ギャラリー 尾辻弥寿雄、高橋康資、佐藤哲也、峯水 亮 5 南佐和子、橋本清志
■ First Message	名誉会員逝去のこと 野町和嘉 11
■ Focus	写真家の役割、写真の力 ～ウクライナ紛争を取材して思うこと～ 尾崎孝史 12
■ Zooming	写真の散歩道(連載 6) 鳥原 学 14 芳賀日出男が切り開いた「民俗写真」の道
■ Workshop	著作権研究(連載 54) 佐々木広人 16 SNS 時代の肖像権とスナップ撮影 ―「作家性」と同様に大事な「どう映るか」問題
■ Convention	第 48 回「日本写真家協会賞」贈呈式 18 受賞者：(株)ケンコー・トキナー 第 17 回「名取洋之助写真賞」授賞式 受賞者：鄒楠(奨励賞) 第 5 回「笹本恒子写真賞」授賞式 受賞者：西野嘉恵 2022 年度会員相互祝賀会
■ Archives	「日本写真保存センター」調査活動報告 (38) 22 ―2022 年度下半期の活動まとめ―
■ Award	2022 年第 17 回「名取洋之助写真賞」報告 24
■ Education	「おやこ写真教室」開催 27
■ Forum	第 16 回 JPS フォトフォーラム 28 「自然と命を撮るということ」講演・パネルディスカッション＝大竹英洋、中村卓哉 野町和嘉(パネリスト)、大塚茂夫(司会)
■ Exhibition	第 5 回「笹本恒子写真賞」受賞記念展 受賞者：西野嘉恵 34 第 17 回「名取洋之助写真賞」受賞作品 写真展 受賞者：鄒楠(奨励賞)
■ Topics	賛助会員トピックス 36
■ Report	2022 年度「フォト・ジャーナリズム論」講座報告 高橋智史、米田堅持 38
■ Books	JPS ブックレビュー 40
■ Information	追悼＝名誉会員・笹本恒子、芳賀日出男、正会員・佐々木伸、 47 丹地敏明、日高勝彦、持田和夫、岩橋崇至、岡部浩二 ／経過報告／写真解説(表紙・表 4)／編集後記
■ Report	セミナー研究会レポート 51 2022 年度第 2 回技術研究会「ミラーレスカメラ用交換レンズの魅力に出会う」 関西地区委員会オンラインセミナー「写真家のためのインボイス制度勉強会」
■ Message	Message Board 52
■ Gallery	X ギャラリー 小倉雄一郎、吉永陽一、荒谷良一 56 表紙・野田知明、表 4・横塚眞己人

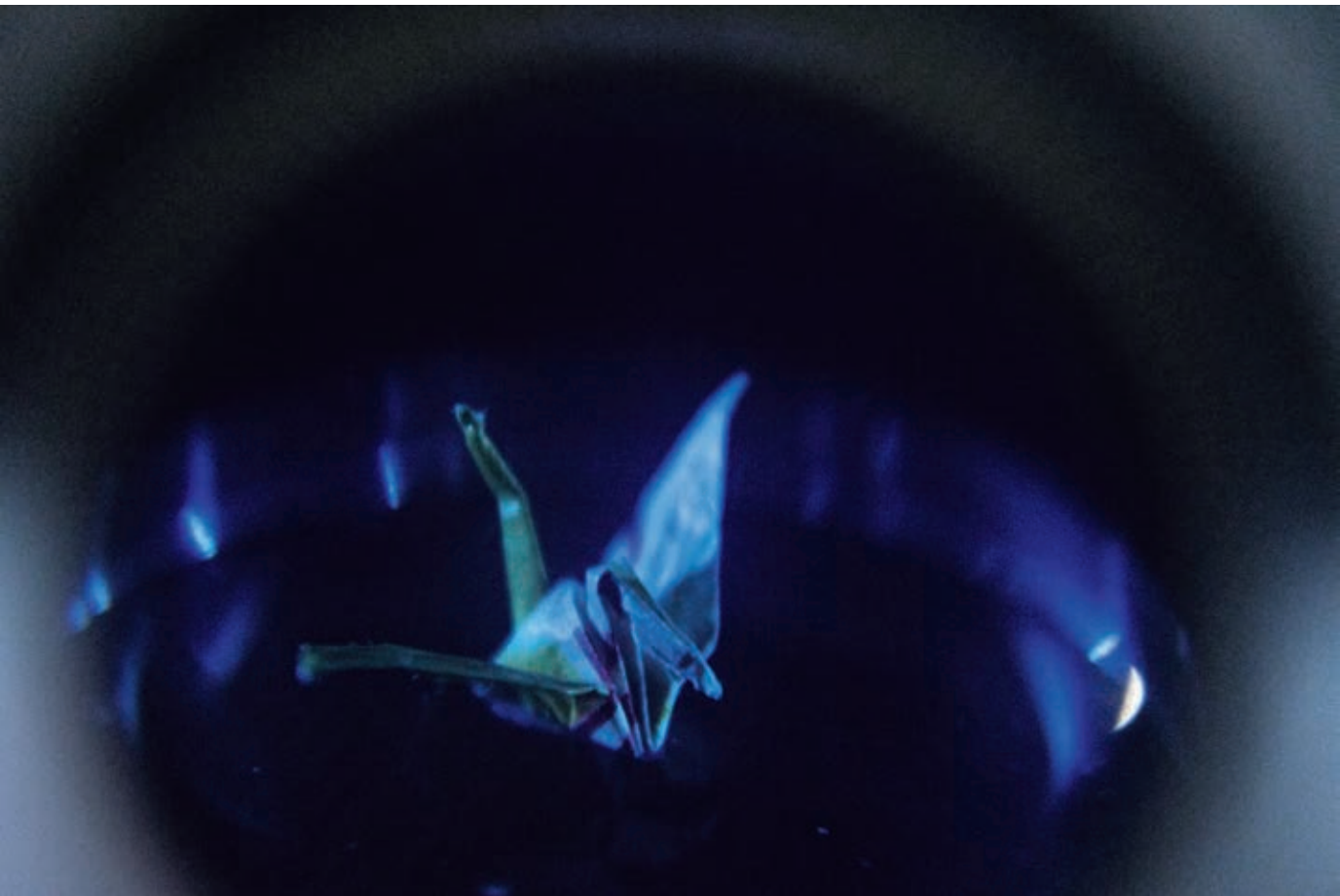
広告 案内

- | | | |
|-----------------------|----------------------|--------------|
| ■ (一社)日本写真著作権協会(JPCA) | ■ キヤノンマーケティングジャパン(株) | ■ (株)シグマ |
| ■ (株)堀内カラー | ■ (株)タムロン | ■ (株)ヨドバシカメラ |
| ■ アイデムフォトギャラリー「シリウス」 | ■ リコーイメージング(株) | ■ 富士フイルム(株) |



想いを写す、フォトギャラリー。

[sirius] アイデムフォトギャラリー「シリウス」 <https://www.photo-sirius.net/>
 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-4-10 アイデム本社ビル2F
 TEL:03-3350-1211 FAX:03-3350-1240 時間:午前10時～午後6時 休館日:日曜



禎子の折り鶴 ————— 尾辻弥寿雄

敵基地先制攻撃である真珠湾攻撃は、日本国民に未曾有の苦しみを強いた太平洋戦争の始まりであった。いま、真珠湾には米軍の世界大戦武勲記念史跡がある。このビジターセンターの片隅に広島で被爆し10年後白血病で亡くなった佐々木禎子さん（12）の折り鶴が展示されてある。少女が生きを願い託した鶴が、米軍の聖地に一つの歴史的事実として共存していることに驚きを覚え、平和への希求は人間の普遍性であると実感した。

写真集・写真展「Pearl Harbor - 海の彼方の戦争遺跡」





シブヤ Shibuya ————— 高橋康資

シブヤのスクランブル交差点をテーマに長い期間撮影してきました。この作品は、いろいろカットを探しながら歩き、ウインドーを通して撮影したものです。左側はウインドーの中のポスター、中心はウインドーに写りこんだ人物、右側は歩道を歩く実像の人物とちょっと変わったカットで撮れたと思っています。「渋谷」は新しい建物が次々に建設され、大きな変貌を遂げ、それは止まることはありません。未来に向かって進化している「渋谷」は今後も撮影・記録して行きたいと考えています。
写真集「シブヤ Shibuya」

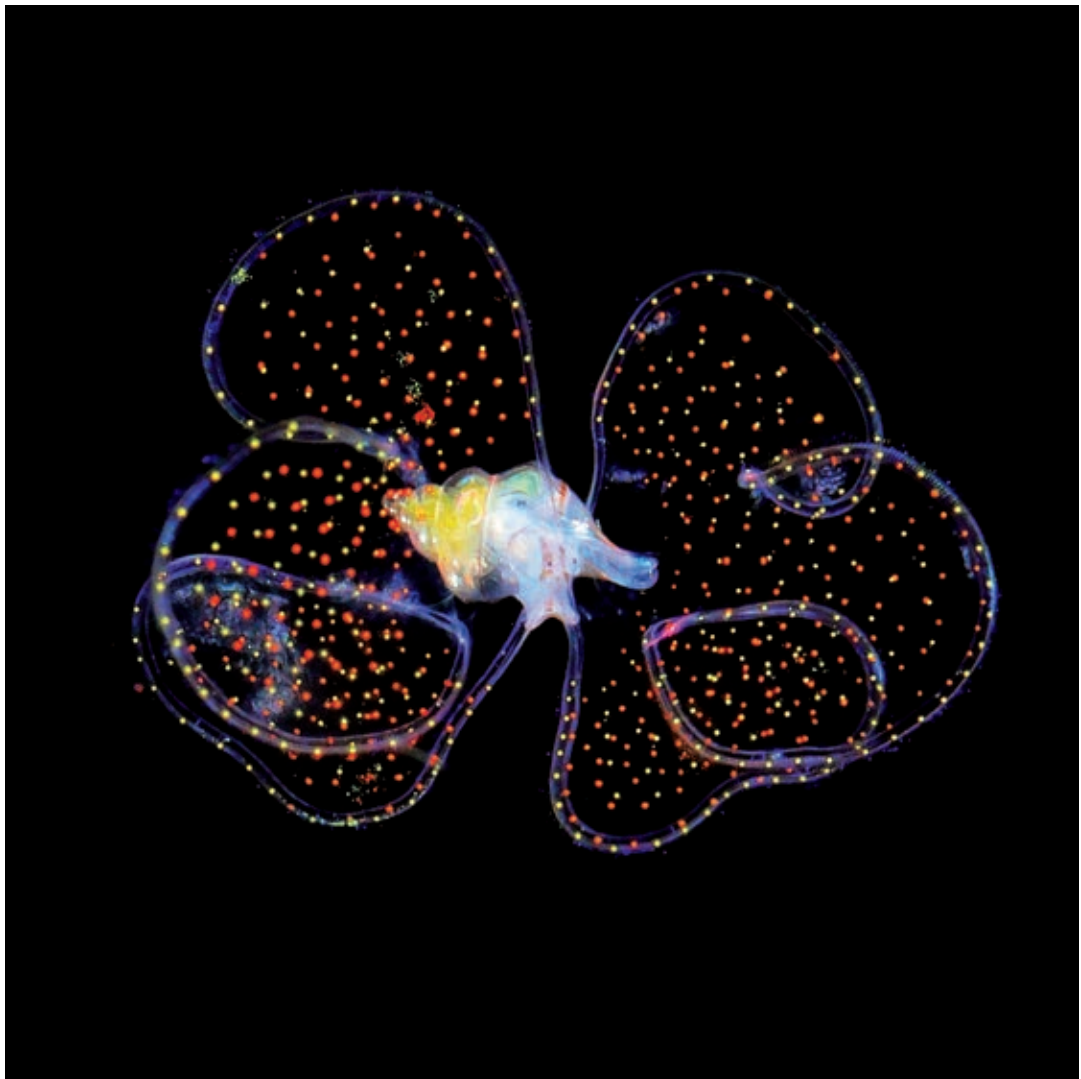




右傾化した若者たち ————— 佐藤哲也

故フランシスコ・フランコ総統に敬意を表する極右の集会が開かれる。マドリード王宮の東側にあるオリエンテ広場までの道のりを、車で行進する若者たちを撮影しました。1975年11月20日まで、フランコ総統による独裁政治が続いたスペイン。2日後の22日はフアン・カルロス1世が王座に就き、王政復古（ブルボン王朝）が復活しました。民主化路線を進めた記念日です。しかしフランコ総統に傾倒する国民も一定数いました。独裁政権や秘密警察による治安のよさは確かにあったからです。（1981年11月22日、スペイン・マドリードのグランビア通りで）
写真集『スペイン ひと・まち・ひと』





Veliger ————— 峯水 亮

軟体動物の巻貝類の幼生“ベリジャー”は、体の縁に繊毛帯（ペーラム）を纏い、蝶や宝石に例えられる可憐な美しさを備えています。大きさはわずか2～3ミリ。種によってさまざまな色使いと個性的な形があります。それぞれが何貝の幼生か知られているのはわずか。水流や振動に敏感なため、そっと近づかないと、貝の中に一瞬でペーラムを格納してしまいます。その撮影は非常に難しく、究極のアプローチと撮影技術を要します。

写真展「phenomenon ～プランクトンの荘厳な世界～」





ダイヤモンドの輝き ————— 南佐和子

アイスランド南部にあるヴァटना氷河から氷河湖に崩れ落ちて浮かぶ氷。引潮の時に川を通して海に吸い出されビーチに打ち上げられる。手前の氷で幅1.2mほどの大きさだ。氷河の氷なので青みがあり、気泡もなく透明度が高い。ここに太陽光が透過するとキラキラと、まさにダイヤモンドのように煌めく。ビーチの砂は溶岩からできた砂なので漆黒で氷とのコントラストが際立っている。この光景がいつまでも見られる事を祈るばかりだ。

写真集『カメラと旅するアイスランド』

写真展「Iceland 最果てのドラマ」 「And Iceland Again」





旧太田川のほとりで ————— 橋本清志

「鯉の領域」からの一枚。広島市街地には六本の川が流れており、川沿いの至る所には雁木が点在し歴史の名残や風情を感じさせます。撮影地は大芝地区の一角。週末になると河川敷ではサイクリングやランナー達で賑わいます。日中、ロケーションをしていると一艘の川舟に遭遇。令和の時代に物懐かしい伝統漁のシーンに出会えたのは幸運でした。今日は何がとれたのだろうか？ 想像を掻き立てるのも写真の醍醐味ですね。

写真集・写真展「鯉の領域」



名誉会員逝去のこと

会長 野町 和嘉

コロナ禍の3年間、人々が一堂に会する機会を持っていないなかで、葬送の意識、慣習も変わり、お別れの機会を逸し心残りを感じている会員諸氏も少なくないと思う。この間にJPSを長きにわたって牽引していただいた名誉会員のうち約半数に相当する、7名が亡くなられた。

この機会に故人たちのことを少し振り返ってみようと思う。前会長の熊切圭介さん、関西で人望の厚かった藤本俊一さん、元副会長の竹内敏信さん、地球規模で自然と対峙してきた白川義員さん、名誉会長であり長きにわたってJPSの顔であった田沼武能さん、107歳というスーパー長寿を全うされた笹本恒子さん、そして民俗と祭りの写真一筋だった芳賀日出男さん。

田沼さん、笹本さん、芳賀さんは1950年のJPS創立以来の会員であり、長寿を全うされた御三方の死去によって創立会員はいなくなった。写真をめぐる環境が激変する現状下にあってこれも節目を象徴する出来事であるかと思う。

亡くなった皆さんはそれぞれの時代を背負った方ばかりだが、時代を疾走した印象深いエピソードを挙げるとすれば、その生き方でひととき強烈な存在観を放っていたのは白川義員さんであろう。「地球再発見による人間性回復へ」をスローガンに、“前人未踏”、誰もなしえなかった偉業であることを声高に唱え、困難をモノともせず、高山、極地、辺境に粘り強く挑戦を続け、写真に命をかけたあの姿勢は誰にもまねはできなかったし、後に続こうとする写真家も出ないだろう。賛否はともかく大自然をねじ伏せた、凄まじいばかりの色彩写真を終生創り続けた。

竹内敏信さんは、風景写真といえば大判、中判カメラが主流だった時代に35ミリによる撮影を先駆け、全国のアマチュア写真家にも大きな影響を与え風景写真ブームを牽引した。超売れっ子で多忙を極めていたが、病気で倒れ晩年は不自由な思いであったに違いない。一方で多くの優れた弟子を育て、彼らが現在の写真界にあって大きな力となっている。

芳賀日出男さんが生涯をかけて取り組んできた、民俗学的視点から捉えた日本の祭りと伝統行事は、貴重な歴史記録として語り継がれていくことだろう。作風とはまたひと味違った人間味溢れる洒脱な方で、お酒が入ると饒舌だった。千円札一枚で、べろべろに酔える一杯飲み屋“せんべろ”巡りに引き連れていただく度に、“60代、70代に良い写真を撮って80代で稼がせてもらうよ”が口癖だった。

日本初の女性報道写真家・笹本恒子さんは、『97歳、好奇心ガール』で再ブレイクを果たし、百歳を越えても現役で活躍を続けていた。102歳を記念して若手写真家の活動を支援する笹本恒子写真賞をJPSに託す形で創設し、後進の育成に尽くされたことには心よりの感謝である。

田沼武能さんほどに生涯現役を貫き通せた写真家もいなかった。しっかりと機材の詰まったカメラバッグを常に持ち歩き、衰えを知らない渾身のエネルギーで写真界を背負い続けてきた。さらにコロナ禍終息のあとには、黒柳徹子さんに同行するユニセフの撮影行も予定のうちに入っていたという。

グラフィジャーナリズムの絶頂期に精力的に活動され、独特の人柄でJPSを長年にわたってよく仕切っていただいた熊切圭介さんを含め、あの時代の写真の世界には無限の可能性があり、それぞれに独自のスタイルを確立し生涯をかけて貫いてきた。写真に対する揺るぎない信頼、社会の後押しもあり、写真家の前には、無限の可能性を秘めた地平が広がっていたと思う。写真界を牽引していただいた先輩方には感謝の言葉しかない。

そして現在、デジタル技術の桁違いの進化によって、映像と写真をめぐる環境は劇的に変わってしまった。地球上の何億人^{まばた}もが技術的な壁を意識することなく、ほぼ瞬きする程度の感覚で、映像写真を撮影、操作できる時代になってしまった。これは未知の地平の幕開けであることに違いない。

写真家の役割、写真の力

～ウクライナ紛争を取材して思うこと～

尾崎 孝史(写真家・映像制作者)

■戦禍のウクライナへ

2022年3月9日、ロシア軍によるウクライナ侵攻の2週間後、私は首都のキーウに入りました。その後、南東部のザポリージャに拠点を移し、10か月が過ぎたところです。私がなぜこの国にやってきて、どんな撮影をしているか。知人の体験もあわせて、現地で感じたことを綴ってみます。

私がこの国に来た理由の一つは、2月24日の開戦後、日本のメディアで「これは第三次世界大戦になるかもしれない」という識者の声を聞いたからです。私はNHKでフリーの映像編集者として働いてきました。「映像の世紀」など多くの戦争関連番組に携わりました。世界規模の戦争の多くは過去のもので、扱う映像は先人が撮影した記録映像でした。それを自らの手で記録できるかもしれない、という根拠なき期待がきっかけでした。

開戦当初は「ほどなく首都陥落か？」という報道もありました。そこで私は、ロシア軍に拘束されるような事態も想定して旅の準備をしました。身軽であることを最優先に、カメラはiPhone SE1台にしました。日本政府はメディアについても入国を認めていなかったため、臨時事務所を設置したポーランドの国境を避け、ルーマニア側からアプローチしました。

現地ではボランティアがバトンをつないでくれて、何とか入国できました。祖国を背に国境に殺到したウクライナ難民の列と逆行しての国境越えでした。そこで出会った国境警備官が、自家用車でキーウまで帰るという知人を紹介してくれました。ヘッドライトやシートベルトが不調の旧型ベンツに乗って11時間、30ほどのバリケードで検問を受けながら、暗闇の首都に辿り着きました。

翌朝走ったキーウの街は、まさに欧州の首都という感じ

の街並みでした。ただし、人影はまばらで、まれに開店している薬局にむらがる群衆が目につきました。ロシアのスパイが潜伏しているのではないかと、兵士や警官が辻々で検問をしています。大統領府に向かってスナップショットを撮影していたところ3人組の兵士に止められました。スマートフォンの提示を求められ、無人の通りや目張りをした窓などの写真数十枚がその場で削除されました。万が一敵の目に触れたなら、戦略を立てるための情報として使われかねないという危機意識が徹底されていたのでしょう。

このころ人々の関心は、ロシア軍に制圧されかねない状況の首都はどうなるのか。そして、「巨大な墓場」となりつつあったドネツク州の港町、マリウポリはどうなっているのか、でした。私が目指していた目的地も、キーウから600キロ以上離れたマリウポリでした。死の危機に直面する住民とともに現場に残り、記録を続けたい。のちに「マリウポリの20日間」というルポを発表したAP通信の記者のように……。しかし、そのときすでにマリウポリへ近づくことは困難でした。幹線道路はロシア軍によって封鎖され、脱出をはかる住民が乗った車が銃撃されることもあったからです。

そこで私は、マリウポリから避難してきた牧師らが立ち上げたボランティア団体に身を寄せることにしました。彼らの拠点はドネツク州の西隣、ザポリージャ州にあります。ロシア軍による占領を回避した州都から、前線の町に残る住民に支援物資を運ぶのが任務です。連日の砲撃によって破壊された町で支えあって暮らす住民。支援する側も家や仕事を失い、生活費の工面に追われています。支援のお礼にと、地元の食材で昼食をふるまってくれた夫婦の家が砲撃を受け、涙の再会になった日もありました。私が思い描いていた「世界大戦」という大仰な単語はいつしかかすみ、終わりの見えない紛争に翻弄される人々のため息や表情と向き合う日々が続いています。

■写真家の役割と写真の力を問う

今回、日本を代表する写真家団体の会報に寄稿する機会をいただきました。「写真家の役割」もテーマの一つだそうです。そこで、読者のみなさんに質問をしてみます。ウクライナ紛争をあつかった写真で記憶に残っているものはどれですか？ その中に日本の写真家が撮影した写真はありますか？ 日本人が撮った映像がウクライナ紛争に影響を与えることはあるでしょうか？

議論のための補助線として、今年3月、私がキーウで声を交わした日本人映像ジャーナリストの言葉を紹介します。



プーチン大統領がウクライナ4州の併合を宣言した日、住民の救出に向かおうとしていた車列に向かってミサイルが撃ち込まれた。民間人30人が亡くなり、88人が負傷した。2022年9月30日 ザポリージャ市

〈何か欺瞞でやるせない気がします。如何に自分が無力かが思い知らされます〉(アラブ圏を主戦場としてきたベテランのフリージャーナリスト)

〈ウクライナ取材前から現地の情報に当たってきて、帰国後も取材を受けたり講演をしたりしてきたが、そろそろメンタルが崩壊寸前なのでしばらく休む〉(紛争地取材に長けた独立系メディアの映像ジャーナリスト)

二人に共通しているのは、民放キー局の中継やVTRでウクライナから情報発信をする業務にあたっていたことです。「大手メディアが撤退したキーウに入った」ということに価値を置くスタジオとのやりとりを、私も違和感を覚えながら見ていました。現地から伝えられる内容はこだわりや深み、独自性が欠けているように感じました。

私自身、ウクライナの市民やメディア関係者、役人などと接する中で、日本人が撮影した映像や日本のメディアが伝えた報道について話題になったことはありません。元朝日新聞の写真記者で、AFPナイロビ支局の千葉康由氏が撮影したロシア軍のドローン攻撃機の写真が、現地で広く共有されていたのを目にしたくらいです。

それでいいじゃないか、何が問題なのだ、という方もいるでしょう。しかし、廃墟となった故郷から避難しつつ、各国のボランティアやメディアと交流し、世界を舞台にプロの写真家を目指そうとするウクライナの若者たちを見ると、いまのうちに变えておくべきことがあるように思うのです。

■報道写真の活性化のために

まず必要なのは写真で、映像で何かを伝えようとする仕事を選んだなら、行ってはいけない、撮ってはいけないと言われた場所へゆき、それを撮るのが普通だ、という発想への転換でしょう。フリーランスも組織に所属するカメラマンも、関係省庁も一般市民も、です。消防士が火の中に飛び込んでも問題にならないのに、写真家が紛争地へ行くと問題視されるのはなぜか。本来の任務よりも、何かあったときに批判の対象になることを排除しておきたいという組織の論理が優先されるような現状はあまりにせつないです。

また、危険を伴う場所での長期取材がフリーランスにしか許されないならば、受け手の媒体の編集者は取材内容や体制にもっと関心を持つべきでしょう。そのことによって、写真や記事のレベルが少しでも世界基準に近づき、原稿料だけでなく、

取材費も保証するという発想が生まれるのではないのでしょうか。日本国内での限定販売で、スペースも限られる紙媒体はさておき、webでの記事を現地語や英語と併記するような議論すら出てこないのはなぜでしょうか。経費が膨らむことを気にして、何をどうやって誰に伝えるべきか検討されないようでは、「うちもウクライナを取り上げている」と証明するための存在でしかなくなってしまいます。

そして、日本の写真家団体はかつてのマグナムのような存在になって欲しいです。世界を飛び回る現役のプレイヤーが最新のリアルな情報を常時交換し、切磋琢磨する関係でなければ、いずれ組織は存続させることが最大目標のハリボテになることでしょう。私が知る限り、日本の写真家団体のいくつかはリベラル系の団体や政党に似ています。会議と機関紙誌、事務所の維持に執着する傾向が強いことです。家も仕事もすべてを失ったところから立ち上がり、自由な発想で新たな国作りへ向かおうとするウクライナの人々と接する中、国境なき写真家の結びつきが広がることを期待します。

(文・写真：尾崎孝史)



故郷がロシア軍に占領されたため、8か月家族と会えなかったフョードル(35)。電話も通じないため、この日祖母や両親と突然の再会となった。2022年11月14日 ヘルソン



ロシア軍が破壊したヘルソンの飛行場。この写真を撮影した1時間後、ロシア軍のミサイル数発が滑走路に着弾した。現場にいた数名の写真家は危うく難をのがれた。2022年12月9日

尾崎 孝史(おごき・たかし)

日本電波ニュース社を経て、フリーの編集マンとしてNHKのドキュメンタリー番組に携わる。沖縄米軍基地、アラブの春、東日本大震災などを撮影。著書に「汐風を



捜して 原発の町大熊の3・11」、「未和 NHK 記者はなぜ過労死したのか」、「厳冬 警戒区域」で視点賞。写真集「SEALDs untitled stories」で日隅一雄奨励賞、JRP 年度賞。(写真左側、現地で合流したJPS会員の渋谷敦志氏(写真右側)と共に)

芳賀日出男が切り開いた「民俗写真」の道

鳥原 学（写真評論家）

Toriyama Manabu

○大連から来た青年

自粛が続いた時期がようやく過ぎ、全国で大規模なイベントやお祭りが再開している。ただし、コロナ禍の経験はこれからも残るはずで、私たちの生活や文化のかたちがそれ以前に戻ることはない。私たちはいま、大きな過渡期に立っているのだろう……。

そんなことを考えていると、「いつの時代も過渡期なんですよ」という声がよみがえってきた。声の主は、2022年11月、101歳の天寿を全うされた民俗写真家の芳賀日出男さんである。筆者は2006年と2014年にインタビューをさせていただいたが、いずれの折にもそうはつきり語られたのだった。半世紀以上にわたり国内外のお祭りなどの民俗行事を訪ね歩く中で、明るい人柄のうえに、スケールの大きな文明観を育てられたのだと思えた。

その芳賀さんが、最初にお祭りに関心を持ったのは1942年の秋である。慶應義塾大学生時代、国文学の授業で折口信夫教授が放った「村の祭りの日に、若者が笠をかぶり、蓑を着て、杖をつき、遠来の神の姿で訪れてくる」という言葉によって開眼した。この神とは村々に幸福をもたらす来訪神、いわゆる「まれびと」をさす。本当に神が現れるなら、写真に撮れるはずだと直観したのである。

旧満州の大連に生まれ育った芳賀さんに、本土の祭礼は縁遠かった。大連は帝政ロシアが開発を手掛け、日本が引き継いで完成させた先端的な計画都市である。今なお往時の姿がよく留められているのは、最近刊行された船尾修さんの写真集『満州国の近代建築遺産』（2022.12集広舎刊）に詳しい。このモダン都市から来た青年に、伝統的な民俗行事は鮮烈な印象を与えていた。

芳賀さんは、慶應カメラクラブの熱心な部員でもあった。芸術写真家の野島康三さんから指導を受け、一年後輩の長野重一さんと腕を競い、写真雑誌にもたびたび作品が掲載されている。ただ、すぐにその腕前で神様を写すことはできなかった。

太平洋戦争が激化した翌年末には学徒出陣で出征、海軍に入った芳賀さんに偵察機の乗員として航空写真

の撮影という任務が与えられた。さらに1945年3月には、「特別攻撃隊員を命ず」との辞令を受け、8月16日にサイパン空襲を命じられることとなる。幸いその前日に終戦となるが「何か割り切れぬ気持ちの中で奇跡的に助かったことを知った」（『丸』誌1969年6月号）。複雑な思いを抱えながら、芳賀さんは新しい時代を生き始めたのだ。



○民俗写真の立場を確立する

民俗写真への第一歩を踏み出すのは1952年の末である。この年、海軍時代の仲間と興した通信社が倒産して収入源を失った芳賀さんは、気分を変えようと、暮れから翌正月にかけて福島県の親類宅で過ごした。このとき現地の正月行事に心を打たれてカメラを向けた。そして折口教授の言葉を思い出し、歳時記を手に全国のお祭りや行事ごとを訪ね歩き始める。そして1954年に広島で「大田植」に出会い、日本の民俗行事の中心にある「稲作儀礼」を自身のテーマに据えた。

筆者が聞いたところでは、この頃、芳賀さんは濱谷浩さんにご挨拶に行かれたようだ。戦前から、新潟県の桑取谷の民俗行事を撮影し、1956年には、名作『雪国』を世に送る濱谷さんへの敬意からである。うかつな筆者はその会話の内容を聞かなかったが、おそらく濱谷さんは民俗写真の楽しさだけでなく、難しさも話されたのではないだろうか。

そう思う理由の一つは、民俗学の創始者である柳田國男さんが、写真について冷淡だったからである。被写体がカメラを意識して自然さを失い、写真家の意図に応じて振る舞うこと、つまり“演出”を嫌っていた。『写真文化』誌1943年9月号での座談会「民俗と写真」では、濱谷さんのほか、土門拳と坂本万七の両氏を相手に、柳田さんはその懸念を強く述べられている。じっさい、戦前の学界で写真は重視されなかった。

だが戦後になって状況は変わり始めていた。民主化の波のなかで、無名の大衆が作り上げてきた歴史や伝統行事が注目されるようになる一方、それが戦後復興の工業化によって失われつつあることへの危機感も高まっていた。そこで伝統的な民俗行事や生活文化を的確に記録できる写真家が求められ、丹念に取材を重ねている芳賀さんが必要とされた。

最初の大仕事となったのは、民俗学会を含む人類学系統の研究者が集結し、1955年から57年まで行われた「九学会連合奄美大島共同調査」である。この仕事に芳賀さんは情熱を注がれ、現地で計182日間を過ごしている。その間、膨大な記録を撮影し、第1回調査の後に出版された写真集『奄美の島々』では編集委員も務められた。そして、このとき得られた経験は、2年後に出版された『田の神』に昇華される。

○写真集『田の神』に託した願い

『田の神 日本の稲作儀礼』（1959年、平凡社刊）は芳賀さんの代表作であるにとどまらず、日本における映像人類学の夜明けを告げた、先駆的な写真集とも位置付けられるべき著作である。それまで取材を重ねてきた日本全国の稲作儀礼が7つのテーマに分けて詳細に紹介され、日本全体に共通する文化の基層と地方ごとのユニークな個性との関係を明瞭に浮かび上がらせている。その冒頭で芳賀さんが書いたのは“危機感”だった。

「今や豊作は田の神の力なくして得られる科学の時代に入った。農業技術の進歩と農村生活の近代化はこの三者（信仰、生産、娯楽のこと ※筆者）未分化の社会を急速に解体しつつある。今こそ稲作儀礼は記録に留める最後の時代である」（「はじめに」）

同書で注目すべきは、民俗写真の撮影手法にひとつの確信を示したことだ。柳田國男さんが否定的に捉えた写真の演出性に対して、芳賀さんはポジティブにそれを肯定する。写真家は被写体との対話を通じて生活に深く入ることで正確な描写ができ、また納得の上で演じてもらうことでその権利を守ることができる。

「演出には撮影者の意図を加えるプラスの演出法と被写体の本質以外のものを取り去るマイナスの演出法がある。記録写真の演出はマイナスの演出法を多く使う。被写体に撮影者の意図を加えるのではなく、被写体のうえにおかぶさっているものや、運動を妨げているもの、偶然無関係に隣接するもの、アクシデントを取りのぞき、結晶だけを明確に見せようとする手段である」（「村人と稲の祭り」）

芳賀さんは、写真を後世に遺すことの重要さも同書で示された。「あとがき」で、写真集のオリジナルプリントを、日本民族学協会附属の民族学博物館に保存したと書かれているのだ。良く知られるように、印刷メディアが全盛の当時においてプリントは印刷原稿として見なされ、その後には処分されることも多かった。

しかし芳賀さんは、オリジナルプリントが持つ情報の豊かさが、将来に役立つことを確信されていた。

著作権管理に対する取り組みも同様で、芳賀さんは、原板を分類して貸し出すストックフォトの体制にも先駆けて取り組まれた。自分の著作物であれば何度でも同じ写真が売れる、特に民俗写真はこのスタイルに適しているはず。そうアドバイスしたのは、渡辺義雄さんや平凡社の編集者で民俗学者でもあった谷川健一さんだったという。じっさい芳賀さんはこの言葉を忠実に実行することで、長期の視点を持って、仕事に取り組むことができた。その実践は、創設時から参加してきた日本写真家協会の会員にとって、良き事例となったことだろう。もちろん、一人でこれを具体化し実現したわけではない。家庭を守り、芳賀ライブラリーのさまざまな実務を担当してきたのは夫人の杏子さんであったことを忘れてはならない。

さて、『田の神』以降、芳賀さんは日本に留まらず世界の各地域のお祭りを取材された。言葉は片言だが、どこでも現地の人々と親しくなり、その生活文化に溶け込むように撮影されてこられた。そのお人柄と仕事ぶりに、筆者は芳賀さん自身が「まれびと」ではないかと思えてならなかった。重要なのは、こうした経験のなかで『田の神』時代とは違ったものの見方をされるようになったことである。2006年のインタビューで、芳賀さんは筆者にこう話してくれた。

「当時は、気負いがあったと思いますね。ずっとやっているとわかりますが、消えていくものもあるけれど、残っていくものもずいぶんとあるんです。つまり、いつの時代も過渡期なわけなんです」

民俗や習俗はけっして消えず、時代や場所にあわせて変形しながら受け継がれる。遠く隔たった地域に共通の文化的要素があり、現代的なイベントも過去の例から生まれている。芳賀さんはその事実を写真で示され、晩年には優れた論考も多数書かれた。それらの仕事に宿る確信が、未来という暗い海を照らす灯台のように思えるこの頃なのである。

（写真提供：（株）芳賀ライブラリー）



『田の神』より「虫送り」（愛知県祖父江町 昭和32年）撮影：芳賀日出男

SNS 時代の肖像権とスナップ撮影 ～「作家性」と同様に大事な「どう映るか」問題～

佐々木広人 (編集者/元『アサヒカメラ』編集長)

スマホと SNS 全盛の時代にスナップ写真を楽しむにはどうしたらよいか? というテーマでお願いした連載の最終回。佐々木広人氏によれば「若者たちは、まったく違ったルールで肖像権を考えている」。我々とは別の価値観を持っている人にカメラを向けるのだから、相手を知らなければトラブルは必至。さらに、写真家と被写体という当事者ではない、写真を見た第三者の感想も影響しているといえます。かつてのスナップ写真の議論とは大きく違います。現在の若者の「肖像感」を解説していただきます。(著作権委員会)

昨年 (2022 年) 12 月の中旬、高校 3 年生の記者が書いた記事が SNS で話題になった。タイトルは「友達との思い出写真は「加工後の顔」ばかり 元の写真も残せば…高校生の後悔」。記事は「高校生新聞 ONLine」(運営: 株式会社スクールパートナーズ) が「Yahoo! ニュース」で配信した。もともとは昨年 11 月に「高校生新聞 ONLine」で配信されたものだったが、1 か月後に「Yahoo! ニュース」で配信されたところ、約 24 時間で 1300 件を超えるコメントが寄せられたのだ。

記事はこんな書き出しで始まる。

<Instagram やツイッター……私たちは日々、SNS を使っています。そんな中、当たり前のように戸惑いなく写真加工する人が多いのでは。加工写真があふれかえる今こそ、加工技術の使い方を見直してみませんか? >

写真の加工によってノートの複写が見やすくなると言及する一方、過度に加工した風景写真と実際の光景との違いに落胆した話に触れ、こう続けている。

<加工すればかわいい顔や美しい顔、若く見える顔、面白い顔にできます。(中略) ただ、私は自分たちの顔を加工した写真ばかり残した結果、中学時代の同級生との思い出写真では、お互いの元の顔が見えなくなってしまいました。元の写真を残しておけばよかったと後悔しています>

リアリズムを重視する写真家や愛好家ならば、この感想を読んで「快なり!」と膝を打つかも知れない。スナップ撮影の復権とばかりに喜ぶ人もいるだろう。普段は辛口な意見が目立つ「Yahoo! ニュース」のユーザーコメントも概ね好意的。私自身もこのニュースを読んで、「ストレートなスナップ写真を見直すいい機会だ」と Twitter に感想を投稿したぐらいだ。

●自分の画像を加工する女性は「7 割超」

では、このエピソードから若者たちの肖像権意識に何らかの大きな変化が起きていると言えるのか。

ここで話を少し前に戻したい。私は前回 (会報 178 号) の連載で、写真の加工を当たり前だと捉える若者たちの肖像権意識について言及した。

大雑把に言えば、こういうことだ。

SNS 時代に育った若者たちは、我々が想像する「リ

アルな自分」のほかに「人前でさらすためのリアルな自分」が存在し、「リアルな自分」をさらすことに非常に抵抗感がある。さらにアバターやメタバースの普及によって、その動きは加速するだろう。その結果、肖像権に対する年配者と若者の捉え方に解離が進んでいくに違いない——という話だ。

では、この高校生新聞の記事を契機に、若者たちが写真の記録性を重んじ、リアルな素顔をさらす機会が増えていくのだろうか。

経済評論家の門倉貴史さんは「Yahoo! ニュース」で、15～49 歳の女性を対象にしたアンケート調査 (2022 年 3 月) を引用し、こうコメントしている。

< SNS に自分の画像をアップする際、加工する人の割合は 7 割を超えていた。若い世代を中心に画像を加工することや加工済みの画像を SNS で共有することはすでに一般化しつつあるといえるだろう >

●「ナチュ盛り」で肖像権意識は変わる?

やはり事はそう単純ではなさそうだ。だが私はあるコメントに注目した。

< アメリカの 10 代には「盛れない」SNS が流行し始めており、Z 世代の加工への考え方に変化が訪れていると考えられます >

「Yahoo! ニュース」にこうコメントしたのは、IT ジャーナリストの鈴木朋子さんだ。

< 顔加工はプリントシール機に始まりアプリでも行わ



筆者も人気のアプリ「SNOW」で自撮り写真を加工してみた (写真右)。確かに「写真の記録性」はどこへやら、である。

れるようになりました。動物の顔になるエフェクトが大流行した頃は、スマホの標準カメラで撮影することを「現実カメラ」と呼ぶ高校生も。その後、「ナチュ盛り」などさりげない加工が流行し、現在は標準カメラの方がいいと言う人達も増えています>

辞書サイト「Weblio」によると、「ナチュ盛り」とは化粧に関する用語で「ナチュラルに盛る」ことを指すという。若者たちが写真の過度な加工に飽きたのかどうかは定かではないが、自然な演出を選択する機運が高まっているとみていいだろう。

この鈴木さんの「ナチュ盛り」の指摘は、前出の高校生記者の「思い出写真でお互いの元の顔が見えなくなってしまった」という言及と併せて考えると実に興味深い。

「ナチュ盛り」の代表例は、すっぴんに近い（と思わせる）自然な感じで美しく演出されたメイク術だという。

ここで注目したいのは「自然な感じで美しい演出」。そこには「美しさ」を一定程度維持したいという意思が存在する以上、明け透けな素顔を積極的にさらそうというものではない。だから、ストリートスナップなどで、ハプニングに驚いて衝撃を受けた表情や、意図せず浮かべた苦悶に満ちた表情を撮られることはもちろん想定外だ。

肖像権が侵害されるか否かの分水嶺としては、最高裁が2005年に示した判断がある。それは「被撮影者の人格的利益の侵害が、社会生活上受忍の限度を超えるかどうか」。「自然な感じで美しく」ありたい若者たちの感覚からすれば、この肖像権侵害の基準は「話にならない」ほど低いだろう。

もし撮影した写真に若者たちが映り込んでいて、それが法的には「セーフ」だったとしても、若者たちは「受け入れ難い姿をさらされた」と感じ、それこそSNS上で異議申し立てをする可能性もある。あるいは縁もゆかりもない人たちが写真を見て異議申し立てをすることもあり得るだろう。

そう、SNS時代の表現で最も難しいのは、第三者への配慮にある。不特定多数の目にさらされることで当事者間の問題が「外野」の声に振り回され、事態が悪化してしまうのだ。

●批判やクレームより怖いもの

前々回（会報177号）の本連載でも触れたとおり、『アサヒカメラ』の読者投稿写真がSNSで「炎上」したのも、被写体になった人たちの告発ではなく、第三者の書き込みがきっかけだった。

スナップ写真を撮影するにあたり、被写体あるいは映り込んだ人物に配慮する写真家は多い。だが、SNS全盛のこの時代に最も留意したいのは、展示・拡散した作品が第三者にどう受けとめられるかという点だ。

『アサヒカメラ』の編集長時代、写真家と最も議論を重ねたのはこの点であった。写真家としてはその1枚を通して見せたい作品性がある。だが、その1枚が読者の嫌悪感を催すきっかけにならないか、作品の世界観を曲解・誤解させないか。編集者としては当然、そ

こをケアする。もちろん読者の作品の理解力によるところは大きいし、「批判なら甘んじて受ける」と豪語した写真家もいた。あえて強調しておくが、多くの編集者はクレームが怖いのではない。むしろ読者に作品性がきちんと伝わらないことのほうが怖いのだ。インターネット社会では、曲解・誤解に伴うものであろうと、ひとたび貼られた負のレッテルを消すのは容易ではない。熱心な好事家が集う写真展や写真集とはワケが違う。

だが、その写真集や写真展でさえ、今やSNSによる告知・宣伝が欠かせない。もはやどの媒体・場所であろうと、発表する作品は不特定多数の第三者の眼差しにさらされるものだと考えるべきなのだ。

●いま一度考えたい「どう映るか」問題

もっとも、写真家自身が「不特定多数の第三者の眼差し」で作品を吟味できるかもしれないが、私としてはおすすしめない。写真家は作品への情熱や思いが強く、第三者の立場にはなりにくい。そこは編集者やキュレーター、デザイナーなどを挟むことが望ましい。それもSNS事情に精通した人ならなおいい。

これは小説や音楽の世界でも同様だ。素晴らしい作品を世に送り出すにも、優れたプロデューサーや編曲家・編集者を挟むことができれば、作品性を損なうことなく伝えられるどころか、いっそう鮮やかなものに昇華させることだって可能だ。

ところで、以前から感じていたことだが、写真・カメラの界限では「何を（何で）撮ったか」の話題が多く、それが人々の目にどう映るのかについての議論が乏しかったように思う。この議論を活性化することで、肖像権問題への誤解はもちろん、写真家の作品への曲解は多少なりとも減るのではないかな。

スマートフォン利用者が増えたこともあって、今や写真に触れる人口は有史以来最多のはずである。この状況を「1億総写真家時代」と指摘したメディアもあったが、この先は「1億総写真評論家時代」になる可能性も否定できない。思い込みや誤解・曲解に左右されない議論を通じ、健全な写真文化を育むためにも、写真を語る開かれた場が欲しいところだ。そして日本写真家協会こそがその主導役を果たすべきではないだろうか。（完）



佐々木 広人（ささき・ひろと）

株式会社キュービック エディトリアルデスク・ゼネラルマネージャー／株式会社アーク・コミュニケーションズ取締役／専修大学文学部講師。朝日新聞社・朝日新聞出版で『週刊朝日』副編集長、『アサヒカメラ』編集長、『AERA dot.』編集長などを務めた後、2021年8月より現職。2012年新語・流行語大賞トッペンを受賞した「終活」の発案者でもある。

※会報174号「著作権研究」（連載49）「写真の公衆送信の基本を考える」に誤植がありましたので訂正します。P.35 左段24行目誤）「犯罪を知った日から〜」（正）「犯人を知った日から〜」

第48回「日本写真家協会賞」贈呈式
受賞者：株式会社ケンコー・トキナー

第17回「名取洋之助写真賞」授賞式
受賞者：(該当者なし)

：^{すうなん} 鄒楠 (奨励賞)「燕郊物語—中国の白血病村」

第5回「笹本恒子写真賞」授賞式
受賞者：西野嘉憲

2022年12月7日(水) 於：アルカディア市ヶ谷「富士の間」

新型コロナウイルス感染症の影響で、協会年末恒例の「会員相互祝賀会」の中止が続く中、2022年は3年ぶりにいつもの会場のアルカディア市ヶ谷で「贈呈式・授賞式・会員相互祝賀会」を開催することができた。

定刻16時半に宮沢あきら会員による司会で始まり、初めに野町和嘉会長から「贈呈式・授賞式・会員相互祝賀会においでくださりありがとうございます。コロナの禍で2020年は東京都写真美術館IFホールで贈呈式のみ、2021年はJCIIビル会議室で贈呈式・授賞式のみを行いました、2022年は本会場で会員相互祝賀会を含めて開催することとなりました。この3年で写真界の環境はずいぶん変わりました。私も10月に写真展を開催しましたが、友人と会話はできてマスクで表情が読めないという状況が世間では未だ続いております。この3年間で残念ながら8名の名誉会員がお亡くなりになりました。これまでの感謝を込めてお名前を発表させていただきます。2020年1月に奈良原一高さん、11月に熊切圭介さん、2021年10月に藤本俊一さん、2022年2月に竹内敏信さん、4月に白川義員さん、6月に田沼武能さん、8月に笹本恒子さん、11月に芳賀日出男さんが亡くなりました。田沼さん、笹本さん、芳賀さんはJPS創立会員でもあり、これにより創立会員全員がいなくなった状況です。8名様方々の多大なる功績に対してお礼を申し上げます。

世間ではお互いにコロナ・ストレスが溜まり、さらにデジタル化で急激に世の中が変わり、写真界も追い詰められている状況ですが、これに打ち勝って頑張ってまいりましょう」と挨拶があった。

続いて、来賓を代表して文化庁参事官付文化戦略官・芸術文化支援室長の林保太氏より「各賞を受賞された皆様おめでとうございます。受賞を契機にますますの

ご活躍をご期待申し上げます。JPS展開催はじめ、歴史的・文化的価値の高いフィルム作品の収集保存、表現・技術の調査研究、国際交流、人材育成など我が国の写真文化の発展に努められ、関係者皆様に敬意を表します。田沼名誉会長、笹本名誉会員のお二人とも年齢を重ねても第一線で活躍され、写真文化の発展に多大なる貢献をされました。本日表彰の皆様も、先人から受け継いだ志を忘れることなく、今後も一層ご活躍されることを祈念申し上げます。文化庁におきましても写真文化関係資料のアーカイブ構築に取り組むなど、我が国の多様な文化の保存継承を図っておりますが、本日お集りの皆様にも写真を通じたそれらの発展のためにお力添えをお願い申し上げます」と祝辞をいただいた。続いて東京都知事・小池百合子氏からの祝電が披露された。

「日本写真家協会賞」贈呈式

2022年度の第48回「日本写真家協会賞」は株式会社ケンコー・トキナーに贈呈した。本賞は写真技術に



「日本写真家協会賞」贈呈式 記念撮影



野町和嘉会長による開会の挨拶により式典を開始した



文化庁の林保太氏より祝辞をいただいた



野町会長より日本写真家協会賞受賞者へ表彰状と記念の盾を贈った



受賞の言葉を述べるケンコー・トキナーの花田聡氏



高村達副会長より奨励賞受賞者の鄒楠氏へ表彰状と賞金を贈った



名取洋之助写真奨励賞受賞の鄒楠氏による受賞挨拶

関する発見、発明、開発において顕著な功績、あるいは貢献、寄与が認められる個人または団体に対して贈られる賞で、贈呈理由は「1957年設立の株式会社ケンコーは、株式会社トキナーとの合併により、2011年に株式会社ケンコー・トキナーとして誕生し、光学と映像の分野で様々な製品を製造し、事業を展開している。特に、60年以上の歴史を有する『ケンコーフィルター』は、プロからアマチュアまで多くの写真家に愛用され、その創作意欲や作品制作に多大な貢献をしてきた。さらに近年には、本社内に『ケンコー・トキナーギャラリー』をオープンし、作品発表の機会を提供するとともに、写真家の活動に対して同社内のセミナールームやスタジオを無償で提供するなど、写真家とその活動をサポートしている。これらの支援活動や製品、およびそれらを通じた写真文化への貢献に対して」である。

ご出席いただいた株式会社ケンコー・トキナー国内本部・部長の花田聡氏に、野町会長より表彰状と盾を贈呈した。続いて花田氏より「当社はフィルターメーカーから始まり今年は65周年を迎えました。現在はカメラレンズ、三脚、写真用品はもとより、工業用産業用レンズ、医療機器のお手伝いもさせていただく企業となりました。2022年も写真の楽しみを多く体験していただくため、新しいフィルターの開発製造、販売を続けております。2021年には中野本社2階にギャラリーをオープンし皆様にお使いいただいております。セミナールームでは写真教室やイベント開催の場として提供しております。2009年より国際フィルターフォトコンテストとしまして、世界の皆様にもフィルターワーク、撮影の楽しみを体験していただき、2022年には第11回をむかえ、50か国、約1,000件の作品を応募いただきました。今後も『写真の一瞬を撮影する／飾る／見る』という楽しみのお手伝いをしたいと考えております」と受賞の挨拶を述べ、壇上で記念撮影を行った。

「名取洋之助写真賞」授賞式

続いて、第17回名取洋之助写真賞の授賞式を行った。この賞は、35歳までの新進写真家の発掘と育成を目的に2005年に創設した。選考は専修大学教授の山田健太氏、第1回名取賞受賞者の清水哲朗会員、野町和嘉会長の3氏で行い、今回は名取洋之助写真賞の



「名取洋之助写真奨励賞」授賞式 記念撮影

本賞該当者はいなかった。同奨励賞は鄒楠（すうなん）氏「燕郊物語—中国の白血病村」に決定した。

授賞式では、高村達副会長より鄒氏へ表彰状と賞金を授与した。選考委員を代表して清水



選考委員の清水哲朗氏による講評

水氏は「今回は9名10作品の応募でした。本賞は該当者なしとなり、奨励賞は鄒氏となりました。応募数については、私が受賞した第1回2005年は66作品がありましたが、その後は名取賞の趣旨理解が進み30作品前後で推移してきました。ここ3年はコロナ禍での取材の難しさはありましたが、今、出来ることを探し、活動し続けていた人がいたのも事実ですので、応募数の減少は別の問題があるのではと感じました。山田先生の総評には『いま伝えるべきことを、いま伝える熱い思いが、応募作品から伝わってこなかった』とあります。前回同様、今回も身近にあるコロナ禍を捉えた作品はほぼなく、社会的に耳目を集めやすいものや、個性的視点の作品が少なく、ドキュメンタリー表現が未熟だった作品が多かったように思います。表現手段が写真から動画へ置き換わりつつある影響が、少なからずあるのかもしれませんが、こんなにも社会的弱者が増えている現代において、そこにレンズを向けないというのには疑問を感じました。粗削りでも良いので、ひしひしと伝わる応募を来年度に期待しております。そんな中で、鄒氏の作品はテーマ性に優れ、応募作品のなかで最も写真力があり、美しいトーンのプリントで仕上げていましたので、選考委員一同から高評価を獲得しました。ゼロコロナを掲げる中国の厳しい条件下で、白血病重症患者を病棟で看護を含めた密着取材をしたというのは重厚な作品と、行動力が称賛に値し、ジャーナリストとしての可能性を感じました。受賞の言葉にこのテーマにかける作者の熱意、覚悟が伝わってきました。名取賞受賞の議論もありましたが、縦軸にも横軸にも掘り下げられるテーマに、さらに完



山口勝廣副会長より受賞者へ表彰状を贈った



「笹本恒子写真賞」受賞の西野嘉憲氏による受賞挨拶

成度の高い作品として取材を継続して欲しいという願いから、奨励賞と致しました。名取賞が該当者なしというのは苦渋の選択でしたが、彼は2019年の選考でも最終選考に残った実力者で、ステップアップしていった歴代受賞者もいますので35歳までのあと2年挑戦し続けていただけたら幸いです。郷さんの今後に期待しております」と講評を述べた。(注：次の第18回から応募資格は40歳までになった)

受賞者の郷 楠(すう なん)氏は「このたびは奨励賞をありがとうございます。日本留学で私の人生は開けました。10年前に来日し、新しい暮らしが始まり、チャンスとなりました。大学で写真と出会い、世界の見つけ方を学びました。九州産業大学に通い、写真技術だけではなく、人生も教えていただきました。今回の作品を制作中、人間の温度を感じ、それは写真の力だと思いました。この受賞は私ひとりの力ではなく、先生方と取材に協力してくださった患者さん方々、その家族の方々のおかげです。これからも初心を忘れずに良い作品を撮れるよう頑張ります」と述べた。続いて記念撮影を行い授賞式を終えた。

「笹本恒子写真賞」授賞式

笹本恒子写真賞は、わが国初の女性報道写真家として活躍された笹本恒子名誉会員の多年にわたる業績を記念して、実績ある写真家の活動を支援する目的で2016年に創設した。笹本氏は2022年8月15日に107歳でご逝去された。今年の選考委員は編集者の佐伯剛氏、前川貴行理事、野町和嘉会長によって行い、笹本恒子写真賞は西野嘉憲氏に贈った。

受賞理由は「写真集『熊を撃つ』『海人-八重山の海を歩く』に結実した、伝統的な狩猟や漁撈に生きる人たちを対象とする、長年にわたる真摯な取材活動と傑出した作品に対して」。

授賞式では、山口勝廣副会長から西野氏へ表彰状と賞金を授与した。選考委員を代表して前川理事は「彼は水中写真を軸足にした写真家の印象で私は作品を拝見したのですが、『海人』は単に水中写真ではなく、八重山で生きる人たちが自然を糧にして海、陸を問わず、いかに人として生きるかに焦点をおいた作品でした。『熊を撃つ』は海から山にフィールドを替え、マタギに密着して撮影した作品で、昨今は皆がインスタ映えする写真を撮れるようになりましたが、彼は写真



「笹本恒子写真賞」授賞式 記念撮影

家としてテーマが他と似通っておらず、被写体が人でも自然でも攻めの撮影をしていることが写真から伝わってきます。それをまとめ上げる力も素晴らしく、本来の写真家の姿が現れています。3人で選考し満場一致で決まりました」と講評を述べた。



笹本恒子写真賞選考委員の前川貴行理事による講評

続いて受賞者の西野氏から「8月にご逝去されました笹本恒子様のご偉大な功績に改めて敬意を表し、心よりご冥福をお祈りいたします。上京の直前に石垣島の小学校からスライドトークの依頼を受けました。児童の写真反応はとても素直です。今回の受賞作品を見てもらい、熊の解体シーンを投影した途端、悲鳴を上げる児童や、目を背ける児童もいました。そのような反応はよく見ますが、熊の解体でお肉になるにつれ、熊はおいしいの？どんな味？という嬉しい感想が沸き上がりました。その質問に子どもたちの実に健やかな心がはぐくまれていることに嬉しくなりました。その後の自由質問ではカメラマンは儲かるの？との質問にヒカキンには負けるけどねと答えておきました。なぜカメラマンになったのか、やりがいは何かなどの素朴な質問が上がり、それらを改めて考え、カメラマンはカメラ1台を持てば、どんな現場にも入って行ける口実が出来てしまいます。ただし私のライフワークの漁撈や狩猟では取材をかくく断られますので、まずは人間関係の構築に時間をかけます。その経緯こそが最もやりがいのある段階で大切です。相手を知り自分を理解してもらうことが、私の仕事にとって一番のやりがいです。それらの人間関係は人生の宝物です。今回の賞をいただくにあたり、これまで取材させていただいた皆さんと一緒にこの受賞を喜ぶことが、私の大きな喜びです」と受賞の挨拶を述べた。最後に受賞者と選考委員で記念撮影し終了した。

2022 年度会員相互祝賀会

2022 年 12 月 7 日 (水) 於：アルカディア市ヶ谷「富士の間」

写真関係者が一堂にそろう「受賞・出版・写真展」などで活躍された会員を相互祝福

同会場にて、3 年ぶりとなる集合記念写真が野田知明会員によって撮影されたのち、会員相互祝賀会が水咲奈々会員による司会で始められた。

はじめに高村達副会長が「3 年ぶりの祝賀会で、懐かしく思います。皆様の元気なお姿が見られ、ゆっくりお話が出来たらと思います。コロナ禍の 3 年間は非常に苦勞の多い期間でした。来年はイベントや企画を実行しますのでご協力をお願いします」と挨拶した。

続いて、来賓の一般財団法人日本カメラ財団理事長櫻井龍子氏より「本日は 3 年ぶりの開催で、懐かしいお顔を拝見でき嬉しく思います。この 3 年間、日本経済や社会は悪い状態で、まだ先も見えませんが、写真家皆様の大変な熱気、エネルギーを発散されているのを肌身で感じ、日本社会をけん引する柱のひとつになるのではと期待しております。皆様と力を合わせ、写真文化発展に頑張っていきたいと思います」と祝辞をいただいた。

本日出席の外部役員、名誉会員、2022 年度名誉会

員に推挙された栗林慧氏を紹介し、野町和嘉会長より名誉会員証を渡した。

乾杯の発声は、賛助会員の株式会社ニコンイメージングジャパン代表取締役兼社長執行役員の上村公人氏よりいただいた。しばらくすると、アコーディオンとボーカルによる久しぶりの音楽演奏が会場を包み込んだ。

2022 年に受賞、出版、写真展開催で活躍した会員の皆さんが壇上集まり、代表して西野嘉憲会員から挨拶があった。さらに 2022 年度の新賛助会社、2020、2021、2022 年度入会の新入会員を紹介した。また、3 年ぶりとなる福引抽選会を吉岡一紀会員の進行で行った。その後、企画委員会の川村容一理事より名取洋之助写真賞とフォトフォーラム報告を行った。続いて熊切大輔理事より 2023JPS 展の紹介を行い、最後に山口勝廣副会長より閉会の挨拶があり、久しぶりの対面での祝賀会は盛況のうちに終了し、散会した。

(贈呈式・授賞式共に記／出版広報委員：小野吉彦、撮影／会員：桃井一至)



会員相互祝賀会の記念撮影 (撮影／野田知明会員)



日本カメラ財団理事長 櫻井龍子氏による来賓祝辞



(株)ニコンイメージングジャパン上村公人氏による乾杯の発声



栗林慧新名誉会員と野町会長の記念撮影



アコーディオンとボーカルによる音楽演奏



2022 年に受賞、出版、写真展等で活躍された会員の皆さん



山口勝廣副会長による閉会の挨拶



3 年ぶりとなる恒例の福引抽選会では豪華景品が多数用意された



2023JPS 展のアピール

「日本写真保存センター」調査活動報告(38)

2022 年度下半期の活動まとめ

写真保存センター委員会

1. 今年度 12 月までの原板調査実績とセンター移転

今年度（2022 年 12 月時点）の日本写真保存センター調査作業状況の報告とし、国立映画アーカイブ 相模原分館（以下、相模原）への原板入庫数は 17,256 本、累計で 147,777 本の原板が低温の環境下で保存されている。また新規収集の原板として笹本恒子 538 本、広島平和記念資料館 2 本（50 コマ）を受領し、神田のセンター内に保管し整理作業を行っていく。収集原板は通気性の確保や、酸化の影響を避けるため中性紙による包材入れ替え等を行ったのち、相模原に収蔵され永年保管される。これによって貴重な写真原板をできる限り長く後世に遺すことができる。これら保管状況を記録した原板データベースへの掲載コマ数は、今年度 2,329 コマにメタデータを付与した形で追加登録し累計で 22,742 コマを数える。

かねてからの懸案事項であった事務所移転を 10 月 1 日に保存センターの担当理事、委員等の協力により無事終了した。新しい事務所は東京都千代田区神田のビルで、資料の一部を三条市歴史民俗産業資料館へ寄贈、作業人員の削減などを進め以前の 1/2 程度の床面積まで縮小することができた。引き続き外部借用倉庫の整理を進めるなどして運用費用の削減に努めたい。



移転後の日本写真保存センター事務所

2. 秋山忠右『空撮大東京』ジャパンサーチギャラリー掲載

秋山忠右（1941 年～2013 年）東京都生まれ、早稲田大学経済学部・東京総合写真専門学校を卒業。石元泰博氏に師事。佐藤晴雄と共作の『カメラ毎日』掲載「若い群像」で第 2 回太陽賞受賞。1965 年からフリーランスとなり、今回ジャパンサーチで特集を組んだ空撮をはじめ、北方謙三と世界を巡る「国境流浪」シリーズなどまさに世界を飛び回って撮影を行っている。その活動は写真のみならずテレビ CM やカンヌ国際広告映画祭にまで及んだ。

今回の『空撮大東京』は、1989 年から 1990 年に撮影された作品の中から「空中写真で見る 変わりゆく東京の風景」と題して 8 点を取り上げ、Google map を併用して現在に東京と比較しながら楽しめるようになっている。中央大橋のかかる前の佃島や、丹下健三設計で現在は取り壊されて東京ガーデンテラス紀尾井町となった赤坂プリンスホテルなど、記録メディアとしての写真の側面をうまく提示した企画である。筆者などは、トップの写真として掲載している築地市場を見ると、少しずつ変わってゆく様子を定点で撮影したらと思



ジャパンサーチ：ギャラリー紹介画面(<https://jpsearch.go.jp/>)

新規ギャラリー紹介



マネの刷版画コレクション オンライン展覧会

東京富士美術館で2019年10月5日から2020年1月19日まで開催された企画展「マネの刷版画コレクション」のアーカイブ



THIS IS JAPAN IN TOKYO ～永遠の日本美術の名宝～ オンライン展覧会

東京富士美術館で2020年9月1日から2021年2月28日まで開催された企画展「THIS IS JAPAN IN TOKYO」のアーカイブ



西洋版画の魅力 オンライン展覧会

東京富士美術館で2021年12月10日から2022年1月30日まで開催された企画展「西洋版画の魅力」のアーカイブ



空中写真で見る 変わりゆく東京の風景

ダイナミックに変遷を続ける大都市東京の姿を、秋山忠右撮影の写真集『空撮大東京』を基に制作された



ジャパンサーチ：ギャラリー画面(https://jpsearch.go.jp/gallery/photoarchive-tokyo_aerial_view)



長野県大鹿村：大鹿歌舞伎 1990年代 撮影：和木光二郎

う。しかし、衛星写真の民間運用が一般化した現在では無用の発想かもしれないと考えると少し寂しさを感じる。こういった記録から導き出される感情が閲覧者の次の創作につながる、これがアーカイブ公開の意義のひとつでもある。

3. 今回収集した写真家、和木光二郎について

1928年生まれのと木氏は映画世界社の写真部に所属し早田雄二氏のアシスタントを皮切りに、芸能誌で映画俳優（銀幕スター）の撮影を数多く行ったのち独立。多くの俳優を撮影しながら得た被写体の背景を見出す力を社会や人物ルポルタージュへと移行、『文藝春秋』、『毎日グラフ』、『週刊文春』などに掲載され、連載を持つようになる。70年代には日本の伝統をテーマに撮影をするようになり、一連の作品は「日本の心を作る」と銘打って『毎日グラフ別冊』に連載され、後に「伝統工芸の里紀行」として『旅行読売』に受け継がれ、これらの仕事をまとめ東京・大阪の富士フォトサロンでの展示を行う。80年代末からは伝統文化への思いは全国の農村歌舞伎へと向かってゆく。「花盛地芝居」としてまとめられ、1998年に東京・大阪・札幌のキヤノンサロンで発表され、『日本カメラ』にも掲載された。10年近くに渡って撮影された作品は埼玉、岐阜、石川、滋賀、山形など、全国12か所を巡って大人から子供まで地域が一体となって行われている様をとらえている。折しも時はバブル経済の真っ只中、ふるさと創生事業として全国の各市町村に1億円が配られた時期でもある。この時期、地芝居は村おこしとして復活を遂げてきた。その熱量を余すところなく、かつ被写体に寄り添った優しい目線をとらえている。特に子供歌舞伎の役者になった子どもとその同級生だろうか、取り巻く子どもたちをおさめた一枚は身分や時代、性別も超える芝居の面白さ、子どもの純粋な驚き、憧れといったものがよく表れている。

4. 今後の活動、寄付と返礼について

大変遅くなりましたが、会員の皆様へご案内しておりました日本写真保存センターへの寄付について4月



石川県小松市：曳山子供歌舞伎 1990年代 撮影：和木光二郎



「氷川丸の新たな船出」 1947年 撮影：吉田潤

からの実施に向けてのご案内ですが、寄付額に応じて収蔵原板からのモダンプリントなどの返礼を用意し寄付を募ることになりました。

具体的には寄付額に応じて、

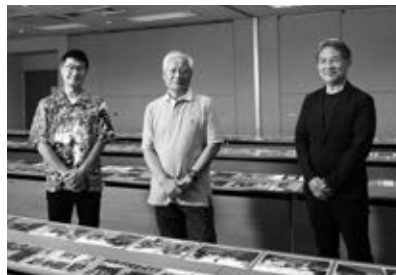
- ① 5,000円～ ポストカード3点
- ② 10,000円～ 額入りプリント キャビネ 1点
(デジタル化したネガからの銀塩プリント)
- ③ 100,000円～ 額入りプリント 8x10inc 1点
(デジタル化したネガからの銀塩プリント)
- ④ 200,000円～ 額入りプリント 11x14inc 1点
(オリジナルネガからのモダンプリント)

の返礼を用意します。対象写真家は、渡辺義雄、吉田潤、田中徳太郎、他ボンベイ、エトルリア壁画を予定しています。関係する皆様のご協力を仰ぐことで、貴重なオリジナルネガからのモダンプリントを提供する機会ができます。今後も新たな作家によるモダンプリントの検討を進めていきたいと思ひますで、日本写真保存センターへ引き続きのご支援をお願いします。

(記／写真保存センター委員・寺師太郎)

2022 年第 17 回「名取洋之助写真賞」報告

公益社団法人日本写真家協会は、新進写真家の発掘と活動を奨励するために、主としてドキュメンタリー分野で活躍している 35 歳までの写真家を対象とした「名取洋之助写真賞」の第 17 回選考会を、過日、山田健太（専修大学教授）、清水哲朗（写真家・JPS 会員）、野町和嘉（写真家・JPS 会長）の 3 氏によって行いました。応募はプロ写真家から在学中の大学院生までの 9 名 10 作品。男性 8 人、女性 1 人。カラー 8 作品、モノクロ 1 作品、モノクロ・カラー混合 1 作品。1 組 30 点の組写真を厳正に選考し、最終協議の結果「名取洋之助写真賞」は「該当者なし」となり、「名取洋之助写真賞奨励賞」に鄒楠「燕郊物語－中国の白血病村」の受賞が決まりました。



選考風景 写真左から清水哲朗、野町和嘉、山田健太の各氏

○最終選考候補者

- ・鄒楠「燕郊物語－中国の白血病村」
- ・小山 幸佑「私たちが正しい場所に、花は咲かない」
- ・鈴木 竣也「" Too far from you... "」

■ 2022 年 第 17 回「名取洋之助写真賞」 該当者なし

■ 2022 年 第 17 回「名取洋之助写真賞奨励賞」受賞



鄒楠（すう・なん） 1989 年 中国江蘇省生まれ。33 歳。

2018 年 九州産業大学芸術学部写真映像学科卒業

2020 年 九州産業大学大学院 芸術研究科造形表現専攻
博士前期課程 修了

2020 年～ 九州産業大学大学院 芸術研究科造形表現専攻
博士後期課程 在学中

受賞作品 「燕郊物語－中国の白血病村」(モノクロ 30 点)

作品について 中国の北京と河北省の境にある「燕郊」という町は、中国で最も有名な血液病専門病院の一つ、「河北燕達陸道培醫院」がある。一般的に白血病患者は治療費が約 100 万円 (1,500 万円) 以上かかる。中国の平均年収は 3 万 5 千元 (70 万円) で費用の負担が重い。中国北部の白血病治療で有名な病院は北京にあり、医療費・家賃が高く、郊外の燕郊は費用が安く抑えられ、多くの患者と家族は河北燕達陸道培醫院を選ぶ。燕郊に住む患者の家族たちは出身地により「同郷会」という自救団体を設立し協力しあっている。中国ではこの小さな社会を「白血病村」と呼ぶ。患者と「白血病村」に住む家族たちの生活を記録した作品。作者が「運命の不幸に対して、どうやって受けるのか、どうやって生きているのか」との問いに向き合える力作である。

受賞者のことば

名取洋之助写真賞の奨励賞をいただき、とても栄誉のあることと感動しています。私の幼年期の友人は「白血病」で亡くなりました。そのことがきっかけで中国「白血病村」の取材を始めました。3 年間の撮影では、新型コロナの時期と重なり、様々な困難がありましたが、取材を受けていただいた方々に感謝しています。この作品を通じて、患者たちの現状に、社会から目が届くことを願っています。

授賞式：2022 年 12 月 7 日 (水) アルカディア市ヶ谷

受賞作品写真展：2023 年 1 月 20 日 (金) ～ 26 日 (木) 富士フィルムフォトサロン東京

2023 年 2 月 17 日 (金) ～ 23 日 (木・祝) 富士フィルムフォトサロン大阪

2022年 第17回「名取洋之助写真賞」総評

野町 和嘉(写真家・公益社団法人日本写真家協会 会長)

先ず今回、第17回名取洋之助写真賞をめぐる応募環境が大変厳しかったことに触れておかななくてはならない。例年、名取賞には、20～30作品前後の力作が寄せられてきたが、今回の応募作品数は10作品のみ、応募写真家は9名という厳しい結果であった。言うまでもなく、コロナ禍が3年目に入り、大幅な旅行制限、行動自粛が続くなかで、テーマを掘り下げて取材対象となる人々と深く交流を重ね、30点の作品を撮り下ろすことに相当の困難があったと推察する。



応募作品の中では、中国江蘇省の出身で、九州産業大学大学院芸術研究科の博士課程に在学中の鄭楠さんの、白血病村のルポルタージュ作品「燕郊物語—中国の白血病村」が注目を集めた。ゼロコロナを掲げた中国のひときわ厳しい状況下において、難病を抱えて死と隣り合わせのところに追いつめられた患者と、その家族たちの空間に密着した撮影は、相当な困難が伴ったであろうことが推察される。

経済的に困窮し追い詰められた患者と家族に密着した労作であることは評価できるが、極めて重厚なテーマであるだけに、もっと肉薄し、また多面的に光を当てることでさらに深みのある作品に結実できたのではないかと、との思いから、更なる継続取材への励ましをこめた奨励賞とし、残念ではあるが、名取洋之助写真賞は今回は該当者なしとした。

清水 哲朗(写真家・公益社団法人日本写真家協会 会員)

全体的に静かで展開に乏しく、30枚組を形にできなかった作品が多い印象を受けました。作者から湧きあがる感情や行動力、取材力の乏しさがそのまま作品に反映されたのでしょうか。視点もオーソドックスで、1枚ごとの写真力が弱く、淡々とした内容の羅列で記憶に残りにくく心を揺さぶられない。世間の実態を知らしめるためには第三者の共感を呼ばなければ何も始まりません。



ドキュメンタリー作家を志す人は一定数いると信じていますが、写真を扱うメディアや指導者の少なさ、ドキュメ

ンタリー表現の形が「写真から動画」へと置き換わっている影響もあるのかもしれませんが。撮りっぱなし動画のような組写真の構成、展開に加え、文字に頼った撮影、長文のキャプション、応募票800～1,000字の撮影意図以外に別途ステートメントまでつける応募者がいたのも伝えかたの変化を感じました。

名取洋之助写真賞奨励賞、鄭楠さんの作品はプリントも美しく、応募作では最も写真力がありました。扱う題材も重く難しいもので中盤までの構成展開は惹きつけられました。ただ「祈り」を描いた最後の5枚が弱く最高評価までは至りませんでした。歴代受賞者として名取洋之助写真賞「該当者なし」は苦渋の選択でしたが、この結果を今後の飛躍に繋げてもらいたいです。

山田 健太(専修大学教授)



ドキュメンタリーフォトの重要な要素としての、いま伝えるべきことを、いま伝えるという熱い思いが、応募作品全体から十分に伝わってこなかったのが残念だった。コロナがあったり戦争が起きたりと、海外をはじめとして取材の制約が多いとしても、社会の課題は目の前に存在し続けているどころか、より多様化・深刻化している。日ごろから社会的関心をきちんと持つことで、自分ならではの視点を見つけて被写体に向き合って欲しい。今日の写真や映像が溢れている時代だからこそ、専門性を持った「プロ」の眼がより重要になってきていることからすれば、本賞の意味は一層重要になっているし、粗削りでもチャレンジングな若い皆さんの応募を心待ちにしたい。

そうした中、社会性と物語性という観点から、中国河北省の「白血病村」を追った作品を奨励賞に選んだ。病との闘いを乗り越えるのに人とのつながりや信仰に救いを求める姿は古今東西共通するもので、その普遍的テーマと療養者家族の集団生活という固有の状況をうまく組み合わせ、患者や家族にまっすぐ向き合った姿勢を評価したもの、縦軸・横軸ともに取材に厚みが欠けている点が否めない。そのほか、パレスチナを扱う作品で手紙を核に据えたユニークな手法が目についたが、作品全体としてまとまりやインパクトの点でもう一工夫がほしかった。

「名取洋之助写真賞」について

公益社団法人日本写真家協会(JPS)は、社会に貢献する事業として「JPS展」や「日本写真家協会賞」の表彰並びに顕彰を行っています。2005年からは「名取洋之助写真賞」を創設しました。

名取氏は、1950年の協会設立初期から写真企画展への助言。更に、写真著作権の重要性を進言されるなど、さまざまな面で協力をいただいています。没後、名取洋之助に関わった日本工房、サンニュース、岩波写真文庫の創設に関してわが国のフォトジャーナリズムの発展に大きく貢献されたことを顕彰し、主として若いフォトジャーナリストの育成に役立つことを望み、この写真賞を創設しました。

●名取洋之助(1910～62年) ドイツに留学していた名取洋之助は23歳の若さで、1930年代ヨーロッパで勃興していたフォト・ルポルタージュをわが国に導入し、木村伊兵衛らと33年「日本工房」を興す。その後、土門拳、藤本四八、亀倉雄策らと『NIPPON』を創刊し、フォト・ジャーナリズムを確立する。戦後は47年に『週刊サン・ニュース』を創刊。50年に『岩波写真文庫』を創るなど、写真家であると同時にすぐれた企画・編集者でもあった。

■ 2022年 第17回名取洋之助写真賞 奨励賞

すう なん
鄒 楠 「燕郊物語—中国の白血病村」 (モノクローム 30点)



「おやこ写真教室」開催

2022年11月20日(日) (株)ケンコー・トキナー中野本社 セミナールーム&スタジオ
教育推進委員会

2020年より始まった「おやこ写真教室」は、今年度2回目を11月20日(日)当協会賛助会員(株)ケンコー・トキナーの会場にて開催した。今回は東京都内での実施となり、教育推進委員6名のスタッフで実施。小学生から中学生の子どもと親の12名が参加した。

小雨の降る肌寒い日であったが、今回は室内実施スケジュールとし、安定した環境で全てのスケジュールを無事に実施することができた。

参加者は受付をすませると、教室の座席には既に貸し出しカメラが置かれていて、これから使ってみるワクワクした気持ちを高めている様子だった。

まずは座学。プロジェクターで撮り方のハウツースライドを親子で見ながら、今回使用する貸出カメラPENTAX K-3 Mark III、RICOH WG-70を手に取り、実際に操作を確認しつつ撮影の基礎や撮り方のコツ等を学んだ。参加者の親子は熱心にスライドを見ながらカメラの操作をあれこれと試していた。

座学終了後は撮影タイム。季節感も感じられる小物のテーブルフォト撮影を中心に撮影するものが盛りだくさん。アングルや明るさを変えて撮影したり、前ボケを作って奥行きを表現する方も。そのほかお互いを親子で撮り合う本格ライティング撮影ブースや、別階スタジオではJPS会員プロカメラマンによる親子写真撮影も行った。みんなが時間内に全ての撮影をスムーズに楽しんでいただけるように教育推進委員スタッフも順次、次々と他のブースへ誘導した。

今回、使用カメラは親子で機種が違うため、それぞれのカメラを親子で交換して撮り方や写り方の違いを楽しむ姿も見受けられた。子どもの年齢層は小学生から中学生と幅広く、年齢により親とのコミュニケーションも様々で、ご家族それぞれのスタイルとして印象深かった。

カメラで撮影した後は、たくさんの撮影画像をじっくり確認してベストショットを1枚セレクトする作業を行った。そしてエプソン販売株式会社よりお借りしたプリンター EW-M873T を使用してセレクト画像を2Lサイズにスタッフがプリントアウト。

プリンターからの写真プリント出力に、小学生の子どもたちはやはり興味津々。今回もプリンターを囲んで真剣に見ていた。同じ写真データでプロジェクターでも上映し、

参加者からの一言コメントと講師からのワンポイントアドバイス講評を行った。スクリーンに自分



親子で撮り合うスタジオポートレート

の撮った作品が映ることと、その作品の印象をその場で話すことも子どもたちにもインパクトある経験となったはずで、見守る親も成長を感じていた様子であった。その後にプリントをテーブルいっばいに並べての鑑賞会も行った。参加者はプロ写真家が撮影した親子写真もお土産に持ち帰ることができ、合わせて2枚のプリントに喜んでもらえた。

最後に全員で記念写真撮影。おそらく子どもにとってはかなり長時間のイベント内容となったが、楽しんでいた様子だった。また親子にとっても同じ内容を受講することでコミュニケーションも生まれ、お互いが記憶に残る良いおやこ写真教室になったのではと感じられた。写真の楽しさや撮影マナーを、プロ写真家と一緒に体験できた。

未来を担う子どもとご家族に、これからも写真を通して楽しい経験を積み重ねるきっかけと学ぶ楽しさを共有するおやこ写真教室。今後のご家族との写真のかわり方に変化をもたらすものとなってほしいと願う。
(記／教育推進委員・美都、撮影／教育推進委員・安藤 豊)



参加者の作品プリント鑑賞会



参加者全員で記念撮影

第16回 JPS フォトフォーラム

(2022年11月12日(土)：東京都写真美術館 1階ホール)

主催：公益社団法人 日本写真家協会

今回のテーマ：

「自然と命を撮るということ」

コロナ禍の影響を受けて2020年と2021年はオンラインで開催していたJPSフォトフォーラムが、2022年は例年通り会場での開催となり、11月12日(土)に東京・恵比寿の東京都写真美術館1階ホールで開催した。プログラムは午前と午後の2回行い、午前の部は10時30分から、午後の部は14時から開始し、午前の部と午後の部ではパネルディスカッションに使用する写真の内容を変えて、参加者によるディスカッションを行った。

今回のテーマは「自然と命を撮るということ」。人間が地球と、地球上に生きる生物との共生を考えながら暮らしていかなければならない、現代に生きる人間が直面する問題について、さまざまな角度からのディスカッションを行った。

開会挨拶：会長 野町和嘉

この2年間というもの、コロナ禍の影響でJPSフォトフォーラムはオンラインでの開催となっております。ただ、オンラインでの開催というものは、生の写真の魅力というものが伝わらないものです。今回、3年ぶりに実際に会場に参加者を迎えて開催できたことを大変嬉しく思います。

今回講演をしていただく2人の写真家、大竹英洋さんと中村卓哉さんは、森、そして海と対照的なフィールドで活躍をされています。大竹さんは、アメリカとカナダの国境付近に広がるノースウッズと呼ばれる地域で躍動する命を追い続け、中村さんは水中写真を専門としながら、さらに視野を広げ、沖縄の基地問題や、環境に関わる問題を追っていらっしゃいます。

お二方とも1975年生まれということで、今日、私が持参しました写真は1972年に撮影したものですから、お二人の生まれを聞いて感慨深いものがあつたのです

が(笑)。まずはお二人の写真を拝見させていただきます、新鮮な体験をお話しいただければと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。



講演：「北米ノースウッズにオオカミを求めて」 大竹英洋

大竹です。今日はこのような素晴らしい会場にお呼びいただき、光栄です。私は今、北米のアメリカとカナダの国境付近に広がるノースウッズという場所で、野生のオオカミを探して写真を撮り続けています。私は写真家を目指した時から「写真家というのは、生き方を問われているのだな」と考えていました。普段から何を考え、何を追い求め、そしてどう行動したか、その先に写真があり、作品が果実だとすると、それが実するためには、木を延ばし、根を広げてゆく時間がとても大事なことになるだろうと考えています。

私は京都の舞鶴で生まれ、東京の世田谷で育ちまし

た。大学生になった時に、新しい世界を見てみたくなり、ワンダーフォーゲル部に入り、沢登りを始めました。その時に私は登った山の標高を競うのではなく、その過程を楽しめるようになりました。沢でイワナを釣って、焚火で焼いて食べる。夜は空に天の川を見て、テントで眠る。その時に、自分はこの星に生まれたんだということを感じました。私はジャーナリストを志望していたのですが、せっかく自然の中に入ってゆく技術を身に付けたのだから、それを人に伝えていきたい。大学2年生の夏休みに、星野道夫さんの写真集と出会い、写真の持つ力を目の当たりにしたことで、写真家を志すようになりました。



森と湖の世界ノースウッズに適応して生きるウッドランド・カリブー
撮影：大竹英洋

ました。とはいいいましても、何をテーマにしたら良いのか分からない。

そんなある時にオオカミの夢を見まして、図書館でオオカミのことを調べた。そして『Brother Wolf』という写真集と出会いました。ジム・ブランデンバーグという方が撮った写真集なのですが、この方に弟子入りをしたいと考え、手紙を書いた。ナショナル ジオグラフィック社の気付で手紙を送ったのですが返事が来ない。そこでブランデンバーグ氏に会うことを考えたのです。氏の記事によく出てくる町の名前がある。そこに行けば会えるに違いないと考えて出かけ、その町まで出かけ、最後は人づてでブランデンバーグ氏に会うことができたのです。けれども、弟子入りは断られました。弟子は取っていないというのですね。けれども、写真を撮りたいというのであれば、自身が所有している小屋があるので、そこを使ってよいという許可を得ました。こうして、私のノースウッズでの撮影が始まったのです。

それからは日本でアルバイトをして、お金が貯まったらノースウッズに出かけて写真を撮る生活が始まりました。この地域には高い山はなく、針葉樹の森と無数の湖が広がっている場所です。地形に高低差がありませんから、見通しはききません。まず、けもの道を見つけて歩くことを覚え、生まれたばかりの鹿と出会い、専門家と一緒に森を歩いてフクロウの生態を学ぶ機会にも恵まれました。山火事の跡に出会ったこともありました。この地で山火事というのは自然の破壊ではなく、火事の跡に若い芽が育ち、それを求めて動物が集まるようになる輪廻の一つなのです。

動物に出会うにはコツがあって、彼らの生態を知る必

要がある。何を食べ、どこで恋をするか、巣がどこにあるかを知っていれば、動物に出会える可能性が高まるわけです。森の中で、動物は音を使ってコミュニケーションを取ります。ある時、真新しいオオカミの足跡を見つけたのですが、オオカミの姿はない。そこでオオカミの声を真似て声を出してみました。(※会場で実際にオオカミの鳴き声を披露) ある人からオオカミの鳴き方を教えて頂いていたのです。これは「みんな、どこにいるの?」という意味の鳴き方だそうで、その声を出してみたら、実際にオオカミがやって来ました。その時は、オオカミに囲まれたらどうしよう?と思ったのですが(笑)、やがて声の主がオオカミの仲間ではなく人間であることを理解して消えていった。ほかにもオオカミが近くまで来てくれたことはあったのですが、まだ、満足のいく写真を撮れる距離までは近づいてくれません。きっと私が、もっとオオカミの生態のことを深く知ることができれば、オオカミは近くまで来てくれるようになるのだと思います。

私のノースウッズの写真には人間も登場します。ここに住む人も今はカヌーだけでなく、モーターボートを使うようになり、生活には変化が生まれている。そのような中で、彼ら自身がどのようにアイデンティティーを保つか苦しんでいる部分もあるように感じています。その暮らしぶりを記録することも私にとっての大切なテーマであり、それ

を追いな
が、これ
からも
撮影の
旅を
続け
ていく
のだ
ろう
なと
考
え
て
い
ま
す。
今
日
は
ど
う
も
あ
り
が
と
う
ご
ざ
い
ま
し
た。



オオカミは用心深い生き物で、滅多に人前に姿を見せない。撮影には細心の注意が必要だ。

撮影：大竹英洋

大竹英洋 (おおたけ ひでひろ)

1975年京都府生まれ。一橋大学社会学部卒業。北米ノースウッズにて、旅、野生動物、人間の暮らしを撮影。『そして、ぼくは旅に出た。』で梅棹忠夫・山と探検文学賞。『ノースウッズ 生命を与える大地』で土門拳賞。日経ナショナル ジオグラフィック写真賞第7回ネイチャー部門最優秀賞、第9回ビーブル部門最優秀賞。両部門での受賞は初。JPS 会員。



講演：「人間が太刀打ちできない海中世界」 中村卓哉

水中写真家の中村卓哉と申します。私の主なフィールドは水中ということになりますが、川とか森にも通っています。まず、ご覧いただくのはやんばるの森です。沖縄県北部の名護市にあり、世界遺産にもなりました。遠くに見える海が大浦湾。一般的には「辺野古」という名前前で知られています。普天間基地の移転先として候補に

挙がっている場所です。私はこの湾の写真を20年以上にわたって撮り続けています。

沖縄といいますが、西海岸の読谷村などがリゾート地として知られていて、観光で沖縄に行かれる方は西海岸が多いと思うのですが、この大浦湾がある東海岸は観光で行かれる方というのは少ないのですが、私は通うよう

になりました。それではなぜ、私が沖縄の東海岸に通うようになったのかといいますと、私は20代の半ばまで東京でダイビングのインストラクターをやっていたのですが、その後に水中写真家になりたいという思いが強くなり、それではどこに行ったらよいのだろうか？それは10歳の時に初めてダイビングをして感動した沖縄の海だと考え、26歳の時にインストラクターの仕事を辞めて、沖縄に移住しました。そして大浦湾に通い始めたのです。

最初は手探り状態でした。2003年の頃でしたが、マスコミでは毎日のように辺野古への基地の移転を論じている。沖縄に住まれている方も移転賛成、移転反対と、いろいろな意見が出ていました。私は政治的な問題には触れないようにしておりましたが、そのような時に沖縄の東海岸でジュゴンの撮影をする仕事が来ました。2003年11月のことです。海に潜ってみますと、東海岸の海は西海岸に比べて知名度が低く、海が「手つかずの状態」になっているところも多かった。これは私にとって大きな魅力でした。そして、私の東海岸通いが始まったのです。

沖縄のジュゴンというのは北限のジュゴンなのだそうです。今ご覧になっている写真の海藻が生えている真ん中に2本の線のようなものが見えると思います。実はこれがジュゴンのみ跡なのです。このような写真を毎日撮り続けるようになりました。大浦湾には青サングの大群落があります。青サングは別名を「縄文サング」ともいまして、3000年以上をかけてこの大きさになります。50m×30m。そして高さ12mの青サングの大群落が大浦湾にあるのです。その大サングが3000年前から、まるで大浦湾の主であるかのようにそこにいて海を見続け、魚を育てている。ですから私は、大浦湾に足を運んだ時は、必ずこの大サングに会うようにしています。

大浦湾には2本の川が流れ込んでいます。この川がやんばるの森で育まれた栄養豊かな水を注ぎこんでいます。私はこの川を遡って写真を撮ることもあります。時にはカメラをハウジングの中に入れて、流れる川の水中写真を撮ることもありますし、カメラをハウジングから出して、虹の写真や、木の枝から落ちる雫の一滴を撮る



縄文サングとも呼ばれ、魚たちのゆりかごとして3000年もの時を経てこの海の命を育んできた。まるで山脈のようであり、この海の主たる住まいは神々しくもある。(沖縄県・辺野古) 撮影：中村卓哉

こともあります。そういった一滴一滴の水が集まることで、辺野古の自然が作られているのだと感じています。

自然の写真というの

は、天気が良いと良い写真が撮れるように感じるものですが、実はそうではなくて、やはり工夫が大切なのだと感じています。今日は天気が悪いから良い写真は撮れないという先入観にとらわれていると、良い被写体に出会っても、それを見つけ出すことができないかもしれない。ですから私は、いつもなるべくフラットな気持ちで、自然と接するように心がけています。大浦湾の岸から400mほど沖合の場所に、「クマノミ城」と呼ばれているスポットがあります。直径4m、高さ2mほどの岩があって、これがサングとイソギンチャクで覆われ、多くのハマクマノミが生息していたことからこの呼び名が生まれたのですが、辺野古の埋め立て工事が始まると、「クマノミ城」の上を赤土が通るようになり、熱帯性海水魚の楽園だった場所が、まるで廃墟のようになってしまいました。私は、基地の問題には安易に反対を唱えることはしていないのです。それは沖縄に住んでいる人にとっても、いろいろな立場があると感じているからです。それでは工事が終われば、「クマノミ城」が元に戻るのか？それは解りません。ですから私は、かならず4月に「クマノミ城」の様子を記録し続けています。

実は、今年(2022年)も行って参りました。写真をご覧下さい。サングが元に戻りつつあります。最近では「沖縄の海が死んだ」ということをよくいわれていますが、よく見ると、こうして海が元に戻りつつある。その理由はわかりません。わからないのですが、海は元の姿を取り戻しつつある。私は、何が美しいとか、何が正しいというような先入観、人間の側の都合ばかりを優先する考え方にとらわれることなく、これからも沖縄の海、自然を撮り続けていきたいと考えています。



ブルドーザーでえぐり取ったような筋道はジュゴンが海藻を食べた痕跡である。絶滅危惧種のジュゴンが暮らす地球上北限の場所がこの辺野古周辺の海域である。

撮影：中村卓哉

中村卓哉 (なかむら・たくや)

1975年東京都生まれ。日本大学芸術学部卒業。10歳の時に沖縄でダイビングと出会い、海中世界の虜となる。ライフワークとする辺野古の海へは20年通い続けている。主な写真集は、『海の辞典』、『パプアニューギニア海の起源をめぐる旅』、『辺野古一海と森がつなぐ命』など。第2回日本写真絵本大賞優秀賞。JPS会員。



パネルディスカッション

パネリスト

大竹 英洋
中村 卓哉
野町 和嘉

司会：大塚茂夫（『ナショナル ジオグラフィック日本版』編集長）

■「良い写真を撮るために、もっと被写体のことを知りたい」

大塚 『ナショナル ジオグラフィック日本版』の大塚です。よろしくお願いします。まず始めに、今日のテーマ「自然と命を撮るということ」に沿う形で、野町会長の作品をご覧ください、解説をお願いしたいと思います。

野町 今日、ここにどのような写真をご覧くださいか少し考えたのですが、大竹さんが北の国の自然、中村さんが海中の世界ということで、私はその対極となる砂漠の写真を持って参りました。写真の場所はリビアの南部です。264頭のラクダによるキャラバンで、川のように見えるのは蜃気楼です。キャラバンは夜を徹して歩き、昼間にごく短い休憩をとります。ある時、調子が悪くなって歩けなくなったラクダがいました。すると、キャラバンの男たちは、このラクダを迷うことなく、屠殺、解体し良質の肉だけを切り取ります。この歩けなくなった1頭に関わって時間を浪費していたら他のラクダに犠牲が出ることを知っているからです。そうして解体したラクダはそのままにして、キャラバンは何もなかったかのように動き始めます。

次の写真はニジェールで撮影したものです。砂漠地帯の非常に厳しい環境下で、人々が生きている。水も一滴もないような場所なのですが、家畜につるべを引かせることによって、地下100メートルの深井戸から水を得ている。この水が唯一、命の糧なのです。

このような厳しい環境の中で、人間が生きてゆくことの意味は何だろう？

何を心の支えにして生きているのだろうか？

私は、砂漠で撮影をしたときに、



深井戸のつるべを引かされるロバ。撮影：野町和嘉



そのようなことを考えさせられました。

大塚 ありがとうございます。大竹さん、中村さんにお見せいただいた世界とはまったく異なる世界、自然についてお話をいただきました。さて、大竹さん、中村さんとも1975年生まれということで、私は、大竹さんと中村さんがお互いにどのように相手を見ているかということに興味を覚えました。そこでお互いが気になる写真を選んでいただき、それを軸にして話を進めてみようと思います。最初は、大竹さんが選ばれた中村さんの写真です。大竹さんは、中村さんが沢の水が流れる様子を水中から撮影した1枚を選ばれましたが、その理由は？

大竹 私は沢登りを始めたことで、自然に触れることの素晴らしさを知ったと申し上げましたが、中村さんのこの写真には、自分にはない視点を感じ、目を見開かされた思いをしました。私もこれからこのような撮り方をしてみたいと、そう思いました。

大塚 中村さんは水中を自分のメインの舞台にされているということですが、どうしてもカメラを水の中に入れてたくなってしまうものなのですか。

中村 そうですね。自分だけの視点、ほかの方が撮れないような写真ということを考えてゆくと、やはり水の中から世界を見るという考え方に行き着きます。この写真を大竹さんに選んでいただいたということは、沢登りの技術がない自分でもこれだけ撮れたのだから、それでは技術のある大竹さんであれば、どのような写真を撮られるのだろう。その写真を見てみたいという気持ちになりますね。

大塚 大竹さんは、これまでカメラをハウジングの中に入れて、水の中に入れるというような撮影をやられたことはあるのですか。

大竹 やったことはありません。ですから、この中村さんのこの視点は新鮮で、森と水というのは、こういう風につながっているのだな、と感じました。

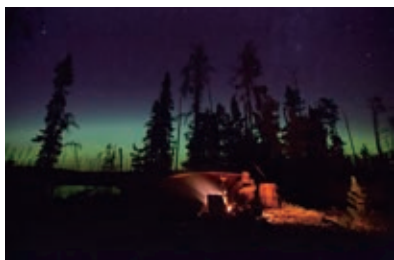
大塚 野町先生は、水の中は撮られていますか。

野町 ないですね。私は、どうしても人にカメラを向けてしまいますね。

大塚 次に、中村さんが選んだ大竹さんの写真です。中村さんは、大竹さんが撮られたオオカミの写真を選ばれました。この写真を選ばれたのは？

中村 私は子どもの頃、『シートン動物記』を読んで育ちました。大学時代には、絶滅したと伝えられるニホンオオカミが、実はまだ秩父の奥に生息しているのではな

いか、という噂が広まったこともあって、実は毎週のように奥秩父に通っていたのです。そんなことがありましたから、私は今でもオオカミに会ってみたいと思っています。オオカミという動物は、やはり王様のような存在なのではないでしょうか。海の中のシャチのような。



取材は、原野でひとり野営をすることも。焚き火で暖を取り、夜空にはオーロラが輝く。撮影：大竹英洋

大塚 大竹さんにとって、オオカミの魅力はどこにあるのでしょうか。

大竹 みなさん、オオカミというと、童話の「赤ずきんちゃん」に出てくるような、邪悪なイメージが刷り込まれているのではないかと思います。実際には、北米での記録では、オオカミが人を襲った例は2件、あるかないかというところで、それも決定的な証拠があるわけではないのです。つまり、オオカミが人間を食べに来るようなことはないのです。オオカミというのは、凄く警戒心が強い動物で、人を容易に近づかせません。私自身は、もっとオオカミに近づきたいと考えていますし、そのためにはオオカミのこと、自然のことをもっと知らなければならぬのだと思っています。そういう意味では、とても難しい被写体を最初を選んでしまったのかもしれませんが、だからこそ、飽きずに追うことができていますのだと思います。

■専門家と共に行動することのメリット

大塚 大竹さんは先ほど、オオカミの声を人から習ったと話されていましたが、専門家の方と一緒に行動されるということもあるのですか。それにはどのようなメリットがあるとお考えですか。

大竹 やはり、無知なままに森の中に入っても、動物の行動様式というのがわからないかと思います。私の知人にはフクロウの研究を30年続けているものがありまして、彼は鳴き声の真似もできます。すると、フクロウが声を返してくれる。どこにフクロウがいるのかがすぐにわかるわけです。見通しのきかない森の中でフクロウの巣を見つけるには、そういった経験と知識を私た

ちが学ばないと、一生かかっても辿り着くことができません。専門家から学ぶことで、私たちの可能性が高まるのだと思います。

大塚 中村さんの場合は、研究者、専門家の方と一緒に仕事をされたことはありますか。

中村 海に潜る時は、やはり地元の方と一緒に行動するのが一番です。1時間もすれば背中へ背負っているタンクのエアがなくなりますから、なるべく「探す時間」を減らすことで、撮影に時間を費やしたい。魚という生き物は、種類によってアプローチが異なります。例えばメバルという魚は、下から近づくと近くまで行けるのですが、上から近づこうとしてもすぐに逃げられてしまう。それは彼らが上から落ちて来る餌を待ち構えているという生態を備えているからです。研究者の方というのは、そういう知識を豊富にお持ちですから、それを学び、あるいは自分でも本を読んで研究を欠かさないようにしています。

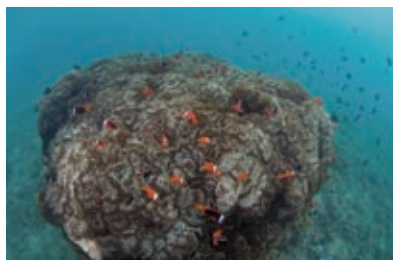
大塚 野町先生、写真家と専門家が共同で作業することというのは多いのですか。

野町 どうですかね。私の場合は、ガイドはつけずに単独で行動して、自分で体で覚えました。ただ、民俗関係の資料を読み込むというような作業は行います。これも共同作業というわけではなく、自分一人での行動ということにはなるのですが。撮影中はあくまでも単独行動です。夜もキャラバンの横に自分のテントを張って、一人で眠っていました。

大塚 私はいつも、写真家の方の行動力に感心させられています。それも写真家にとっての大切な資質、生命線なのかもしれませんね。

■「良いところだけ撮る」というのではなく

大塚 次の写真に移りましょう。次は大竹さんが選んだ中村さんの写真です。これは「クマノミ城」の写真で



イソギンチャクに覆われたクマノミ城と呼ばれる場所にはクマノミの棲家となるイソギンチャクに覆われハマクマノミの楽園のような場所だった。(2010年4月) 撮影：中村卓哉

野町和嘉 (のまち かずよし)

1946年高知県生まれ。写真家・杵島隆氏に師事し、1971年に独立。1972年、20代半ばでサハラ砂漠に旅したことを契機に、極限の風土に生きる人々の精神世界、信仰をテーマに地球規模で取材を続ける。2000年以降は、アンデス、インド、イランを中心に取材。土門拳賞、芸術選奨文部大臣新人賞などを受賞。2009年、紫綬褒章受賞。JPS会長。



大塚茂夫 (おおつか しげお)

1969年静岡県生まれ。大学で比較文化を学んだ後、放送局で放送番組の制作、航空会社で貨物営業を経験し、2004年2月から「ナショナル ジオグラフィック 日本版」の編集に携わる。2011年1月に編集長に就任、日経ナショナル ジオグラフィック写真賞の審査員も務める。





す。最初の写真が2010年4月の撮影。次が2013年の4月です。大竹さんが、この写真を選ばれた理由は？

大竹 一つのフィールドに通い続ける、長い時間をかけるからこそ、見えてくるものがある。中村さんの写真には、それを感じさせる力があり、定点で観測を続けることの大切さを感じることができました。

大塚 それは私も同じです。辺野古の開発によって、廃墟ようになってしまった「クマノミ城」が、後日になって復活している。そのカットを見て、私はほっとしました。講演では中村さんが「フラットな心で気持ちで自然と接する」ということを仰っていたのですけれども、そのあたりを、もう少しお話いただけますか？

中村 実は、辺野古の海を撮っている時に「良いところだけ撮るのだろう」「死んだような場所は、切り捨ててしまうのだろう」というような声も聞いたのです。けれども、自分が撮るからには、そのようなことはしたくない。美化するのではなく、例えば写真の色調にしてもナチュラルなものとして、海の色が緑から青に変わるグラデーションを大切に考えて、赤潮が入ってくれば海が濁ることもあるけれど、それも記録しなければならないと考えます。

大塚 自然を相手にしていると、色をつけようと思えばつけることもできると思うのですが、大竹さんの心構えというのは、どのようなものなのでしょう。

大竹 写真の色についても、撮ったものをそのまま見せることはしない。釣った魚をそのまま「どうぞ」といって料理として出す人はいないわけです。捌くのか、塩、胡椒で味付けをするのか、それはいろいろな方法があると思うのですが、1枚の写真をきちんと鑑賞できるように仕上げるという作業は行っています。現代の写真は後処理でどのようにも加工できるのですが、ただし、素材の味を失わせないことは大切だと考えています。

大塚 次に中村さんが選んだ大竹さんの写真も、同じ定点観測による写真です。1枚が山火事の跡の写真。もう1枚がそこで芽吹く若い芽の写真です。

中村 私が撮ったサンゴの崩壊と同じ視点を感じました。山火事というのは自然の摂理の一部であって、それはサンゴの崩壊と同じである。それを「守ろう」と考える人間というのは、おこがましい存在ではないか…。

野町 アメリカのイエローストーン国立公園でも、その考え方を実践しています。山火事が起こっても放置して



消すことをしない。人の手を入れずに自然の再生を見守っています。

大竹 山火事というのは、年間に何万回というペースで頻発しているのです。人間が住む小屋などに火が及びそうになったら消火活動をしますが、自然は自然にまかせておいた方が良いという考え方です。山火事が起こるたびに慌てて火を消し続けていると、今度は木が増え過ぎてしまって、一度起こった山火事を消すことができなくなる。そういうことも経験によってわかっているのです。自分一人の人生の中だけでなく、何百年というスパンで物事を見ることが大切なのだということも、自然を相手にしていると感じさせられるようになります。

大塚 お二人の活動にこれからも期待したいと思いますが、現代の写真家を取り巻く状況というのは、それほど良くないと感じています。メディアは雑誌の数が減り続ける中で、個人の作品の発表の場がSNSに移行している。そのような中で、これからお二人がどのように活動していこうとお考えになっているか、教えてくださいませんか。

中村 写真を撮るといふ行為は変わりませんし、個人が自由に情報を発信できるようになった。自分としては、撮りたいものを撮って、それを自分のペースで発信し続けていきたいと思っています。

大竹 写真というのは終わりのない世界です。自分が自然をどう理解しているのか、どう理解を深めていけるのかということから1枚の写真が生まれる。そのプロセスを楽しみながら、撮影を続けていければと思います。

大塚 本日はありがとうございました。

——この後、高村達 JPS 副会長の挨拶があり午前の部が終了。午後の部は大竹氏、中村氏による講演を行った後、使用する写真を午前の部とは変えて、午後の部のパネルディスカッションを行った。

〔JPS フォトフォーラム協賛〕エプソン販売（株）、OM デジタルソリューションズ（株）、キヤノンマーケティングジャパン（株）、（株）シグマ、（株）タムロン、（株）ニコンイメージングジャパン、富士フイルムイメージングシステムズ（株）（50音順）

（記／出版広報委員：池口英司、撮影／出版広報委員：川上卓也）

第5回「笹本恒子写真賞」受賞記念展

西野嘉憲写真展「狩りたてるもの」

2022年12月22日(木)～28日(水)
アイデムフォトギャラリー「シリウス」

第5回笹本恒子写真賞の受賞を記念した、公益社団法人日本写真家協会主催・西野嘉憲写真展「狩りたてるもの」を2022年12月22日(木)から28日(水)まで、アイデムフォトギャラリー「シリウス」(東京都新宿区)で開催した。

笹本恒子写真賞は、日本写真家協会が報道写真家として活躍した笹本恒子氏の業績を顕彰し、その精神を受け継ぐ写真家の活動をたたえ、助成することを目的として創設された。今年度が5回めの受賞となる。

今回は写真集『熊を撃つ』『海人-八重山の海を歩く』に結実した、伝統的な狩猟や漁撈に生きる人々たちを対象とする、長年にわたる真摯な取材活動と傑出した作品に対して賞が贈られている。前者は飛驒の山中で熊狩りをして暮らす人々の、後者は八重山諸島で漁をして暮らす人々の日常をテーマにした写真集で、どちらも、日本人の多くが忘れかけているに違いない「狩り」に生きる人々の日常が描かれている。

「私が写真を始めたのは20歳の頃でした。最初は、いわゆるネイチャーフォトを撮っていました。主なフィールドは琉球列島です。そのうちにあるきっかけから、漁師さんや、ハブ捕りの方と知り合い、その時から純粋な自然ではなく、人と自然の関わりを撮るようになりました。そこに都市生活者が忘れた大切なものがあるように感じたのです。人間は自然から搾取をしなければ生きていけない。それではその理想の形とは何なのだろう?もしかしたら、八重山の漁師さんや、飛驒の猟師さんたちは、それを持っているのではないだろうか?そのように感じたのです」と、西野さんは一連の作品の撮影を始めたきっかけをそう語る。

もちろん、人間が使う道具は、昔とは比べものにならないほど進歩している。最新の性能を備えた漁船や、スキューバダイビング用のエアタンクを使えば、漁獲量は飛躍的に向上することが期待できる。けれども、自然の中に暮らす人々には、決して超えることのない一線があるようにも感じられる。

「彼らとて昔ながらの方法だけでは、生活が成り立たなくなっています。漁に出る時はエンジ

ン付きの船に乗り、タンクを背負うこともあります。そこには試行錯誤があります。私は、そんな彼らの逞しい創意にも興味があります。生業なので、きれいごとだけでは成り立ちません」

—— 漁にカメラマンが付いてくるというのは、彼らにとって邪魔ではないのでしょうか?

「そのとおりです。ただ、私の写真を見て頂くと、『苦勞して撮られたのですね』という言葉をかけて頂くことが多いのですが、私自身は苦勞したとは思っていません。漁師の方と一緒にいて、大漁の時は一緒に喜び、不漁の時は一緒に悔しがる。そうやって少しずつ仲間に入れて貰えたということでしょうか。もちろん、漁にも興味がありますから、網をたぐるのを手伝って」

—— 漁師の方の足を引っ張らない程度にですか?

「いや。足は十分に引っ張っています(笑)。私にとっては記録することが仕事でもありますけれど、漁をしている人にとっては、それはどうでも良いことで、余計なお世話でしかない。それでも仲間に入れて頂けたのは、『今日はたくさん獲れたね。明日もまた来いよ』というような人間関係を構築する過程と一緒に楽しめたからでしょう」と西野氏。

—— それではこれからの予定は?

「狩猟というと、どうしても残酷な面が強調されたり、逆に伝統の部分を美化されたりしがちですが、そうではなく、都会に住む人が電車に乗って会社に行くのと同じような『日々の営為』としての部分を切り取りたい。そういう視点で、これからも日本独特の漁・猟の形、あるいは風土に生きる人々の当たり前の日常を記録していればと考えています」と、西野氏の言葉は、最後まで穏やかだった。

(記・撮影/出版広報委員:池口英司)



会場で展示作品をバックにした西野氏



受賞記念展の案内状 DM



展覧会は新宿区の「シリウス」で7日にわたり開催した

第17回「名取洋之助写真賞」受賞作品 写真展

名取洋之助写真賞奨励賞・鄒楠「燕郊物語—中国の白血病村」
「報道写真家・名取洋之助」展

【東京展】2023年1月20日(金)～26日(木)

富士フィルムフォトサロン東京

【大阪展】2023年2月17日(金)～23日(木)

富士フィルムフォトサロン大阪

公益社団法人日本写真家協会が主催する2022年第17回「名取洋之助写真賞」(24～25頁参照)の受賞者による受賞作品写真展を、富士フィルムフォトサロン(東京/大阪)で開催した。同時に日本のフォト・ジャーナリズムの確立と発展に多大な貢献をされた、名取洋之助氏の写真展を開催した。

名取賞奨励賞受賞の鄒楠(すうなん)氏に写真展会場で、白血病患者の取材を始めた経緯や、取材中のエピソードなどを伺った。鄒氏は2012年7月に日本語を学ぶために来日し、現在は九州産業大学の博士課程で造形表現を専攻している写真家である。



展示会場での鄒楠氏

◆遊び半分の写真からドキュメンタリー写真へ

写真との出会いは、日本語学校のクラスメートに写真の好きな友人がいて、彼の影響で写真に興味を持ちました。最初は遊び半分で撮っていたのですが、ある時「写真には人間の眼が見た物以上の『何かが映っている』と気づき、写真を本格的に学ぶことにしました。

優れた写真をたくさん見るうちに、私はマグナムフォトの写真家たちのように、「人間のドキュメンタリー」を撮りたいと思い始めました。困難な状況の中で一生懸命に生きる人々の姿を記録し、世界を少しでも良くしたいと思ったのです。

◆友人の死の記憶、コロナ禍の取材

ドキュメンタリー写真を撮りたいと思って、偶然雑誌で白血病の患者さんの記事を読みました。その時白血病に関する自分の記憶が蘇りました。11～12歳の頃、私の年上の友人が白血病で亡くなっていたのを思い出し、白血病患者を撮る決心をしたのです。

血液の病院として有名な「河北燕達陸道培醫院」から許可をもらい、2019年から2021年まで4回にわたり取

材しました。取材中は病院の近くに住み、一回の取材に1か月位かけたのですが、コロナ禍のため取材に制限が出始め、最後は病院に入れず、病院の外で患者の家族を撮影しました。

◆取材を通じて感じたこと

デリケートなテーマなので、患者の方とは時間をかけてコミュニケーションを丁寧に取りました。来場者から「重いテーマなのに自然な表情や姿が良く撮れてますね」といわれたときは嬉しかったです。

患者の方との思い出は沢山ありますが、撮影した翌日亡くなられた患者の訃報を聞いた時はショックでした。また15歳のとき発症し、20歳で再発したけれど退院でき、恋人と婚約された女性とは今でも友人として連絡を取り合っています。取材を通じて人生の厳しさ、諦めない気持ちの大切さを教わりました。患者本人の努力や家族の支え、病院の医師やスタッフの熱意、社会の支援が大切ですが、「それでも人には運命がある」と実感しました。

◆写真を学び始めた若者たちへ

アドバイスですか、難しいですね。まず自分の家族とか大切な人々にレンズを向けてみてください。そして名作写真をたくさん見て自分が関心を持てる写真のジャンルを探ることが大切だと思います。

白血病患者の取材は今後も続けようと思いますが、今は福岡に住む中国人の家族を、「リアルとアンリアル(演出)」をコンセプトに作品を制作しています。

最後に写真作品発表のチャンス頂き、関係者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



中国出身の若い写真家と、第二次世界大戦前から戦後にかけて活躍した日本の写真家の同時写真展は、両国の現代史を鑑みれば感慨深いものがあった。名取洋之助氏もこの写真展を観て天国で微笑んでいるのではないかと、想像しながら会場を後にした。

(記・撮影/出版広報委員：飯塚明夫)



受賞作品写真展の案内状 DM



受賞作品を見る来場者(富士フィルムフォトサロン東京)

ライカカメラジャパン

レンジファインダー式フィルムカメラ「ライカ M6」が装い新たに登場

昨今のフィルムカメラの人気再燃を受けて、M型カメラの新たなラインアップとして、「ライカ M6」が加わりました。ライカの歴代におけるレンジファインダーカメラの中でも「ライカ M6」はフィルムカメラとしては特別な存在で、1984年から2002年にかけて手作業によって多くのカメラが製造され、多くの写真家に愛用されました。その結果、数えきれないほどの歴史的な瞬間が記録され、それらは史実を伝える傑作として今なお語り継がれています。



モダンなM型レンジファインダー式カメラへと生まれ変わった

2022年版の「ライカ M6」は、光学系の各パーツにはコーティングが施され、逆光の影響を受けにくくなっています。ファインダー内には、露出表示の2つの三角LEDに加えて赤いドットを1つ、そして電池の残量表示も追加されています。トップカバーは亜鉛ダイカスト製から無垢の真鍮から削り出されたパーツに変更され、耐傷性に優れたブラックペイントが施されています。また、本体正面には、1984年に製造された「ライカ M6」と同じ「Leitz」の赤いロゴが配されています。

新旧どちらの「ライカ M6」も、撮影に必要な機能だけを厳選していることには違いがありません。手作業で丁寧につくり上げている“Made in Germany”のたしかな信頼を誇るカメラであり、静かに、より深く撮影を楽しめるという、時代を経ても変わらないフィルムカメラならではの魅力が味わえる一台です。

品名：ライカ M6

Body 価格（税込）：748,000 円

【問い合わせ先】

ライカカメラジャパン・カスタマーケア

TEL：0570-055-844（ナビダイヤル）

<https://leica-camera.com/ja-JP>

フレームマン

業界世界初除電システム導入

コロナ禍の中、緊急事態宣言により世の中の動きが止まってしまいました。その状況下で悩んでいても仕方がない、動かない・動けない時にこそ、日頃中々手がかけられなかった事を手掛けて、色々と改善・導入をしてきました。

社内にある、業界初世界初のオリジナルの大型ローラー機にて裏打ちをする際、チリや埃が混入しない様に吹き飛ばしつつ、静電気を完全に除去して埃などを呼び付けけないオリジナルの静電気除去装置を4台のローラー機全てに設置致しました。以前はローラー機の清掃・拭き取り作業、エアガン、空気清浄機の作動からスタートしておりました日常の業務にプラスして、静電気感知器で静電気の測定、静電気除去専用ブローア及び専用エアガンにて除去、測定器がマイナスになった状態でオリジナル装置のスイッチを作動。この状態でローラー機から直径3mは静電気がない状態で作業を行うことが出来るようになりました。



【問い合わせ先】
株式会社フレームマン：奈須田一志
TEL：03-5638-2211（代）

富士フィルムイメージングシステムズ

「独自の色再現技術による卓越した画質と小型軽量を実現する「X シリーズ」の最新モデル「FUJIFILM X-T5」発売。進化した“写真機”登場！



「X-T5」は、「X シリーズ」第五世代の裏面照射型約4020万画素「X-TransTM CMOS 5 HR」

センサー・高速画像処理エンジン「X-Processor 5」により、高画質を実現するミラーレスデジタルカメラです。質量約557gのコンパクトボディに5軸・最大7.0段のボディ内手ブレ補正機能やAIによる被写体検出AFを搭載し、高い機動性を発揮。シャッタースピードなどの3つのダイヤルや3方向チルトの液晶モニターなどを採用し、直感的かつ快適な写真撮影を可能とします。このほか、6.2K/30P 4:2:2 10bitでの映像記録に対応。ファインダー倍率0.8倍・369万ドットのEVF、SDカード対応のデュアルスロットなどを備え、幅広いニーズに応えます。

当社は、新開発のイメージセンサー・高速画像処理エンジンを搭載した「X-H2S」・「X-H2」を投入し、「X シリーズ」を第5世代へと進化させました。高画質・高機動性を追求し静止画撮影に最適な「X-T5」を新たにラインアップに加えて、「X シリーズ」の

魅力をさらに広げていきます。

【問い合わせ先】

富士フィルムデジタルカメラサポートセンター

TEL：0570-04-1060（ご利用いただけない場合：03-6625-2809）

受付時間：月～土 9:30～17:30

※日・祝日・年末年始を除く

<http://fujifilm-x.com/ja/>

ケンコー・トキナー

1kg ちょっとの軽さでも太いパイプの三脚。スリック レプトス A294 BH

ケンコー・トキナーは、スリック株式会社製の製造する三脚を販売していますが、軽量ミラーレス機を対象として、1万円台の価格を実現するために、カーボンではなくアルミ合金製パイプを採用した「スリック レプトス A294 BH」を発売しています。三脚は重い、持ち歩きたくない、という方にも、抵抗なく持ち歩ける1.13kgの軽さを実現。4段レバーロック式の脚により、畳んだ長さは545mm、エレベーターを伸ばすと1,585mmと十分アイレベルをカバーします。



雲台は、自由雲台で直感的に構図の調整が可能、水平パンのみ独立回転ができるため、構図の微調整にも役立ちます。カメラの取り付けは、アルカスイス互換規格のクイックシューを採用。カメラの着脱も簡単に、スムーズに行うことが可能です。さらに、脚パイプは扇形の変形パイプ、エレベーターも特殊な三角断面とすることで、29mm幅の脚を採用しながらも、携行時は直径約66mmと、手で握りやすいスリムさを実現しています。2段階の開脚機構や、エレベーターの上下反転機構を使えば、ローポジションでの撮影や、俯瞰撮影にも対応。

もちろん、サブの三脚としても最適です。

【問い合わせ先】

株式会社ケンコー・トキナー

担当者：田原栄一

TEL：03-6840-2970 FAX：03-6840-2962

メール：etahara@kenko-tokina.co.jp

<https://www.kenko-tokina.co.jp>

凸版印刷

「世界のブックデザイン 2021-22」
2023年4月9日（日）まで開催

本展では、2022年2月にドイツ・ライプツヒで開催された「世界で最も

美しい本 2022 コンクール」で選ばれた受賞図書とともに、日本の「第55回造本装幀コンクール」をはじめ、ドイツ、オランダ、オーストリア、フランス、カナダ、中国で開催されたコンクール入賞図書を加えた約160点を展示しています。各国で通常に近いかたちでコンクールが実施され、本展も3年ぶりにコロナ禍前の展示方法にほぼ戻しての開催となりました。また、本年は十数年ぶりにフランスで開催されたコンクールの受賞図書を紹介しております。

手袋の着用はお願いしておりますが、すべての出品作品を手にとってご覧いただけます。この機会に世界最高峰のブックデザインと造本技術をお楽しみください。

【問い合わせ先】

印刷博物館

東京都文京区水道1丁目3番3号トッパン小石川本社ビル

開館時間：10:00～18:00

休館日：毎週月曜日

TEL：03-5840-2300（代表）

FAX：03-5840-1567

<https://www.printing-museum.org/>

OM デジタルソリューションズ

防塵・防滴保護等級 IP53、-10℃の耐低温性を備えた小型軽量ミラーレス一眼カメラ OM SYSTEM OM-5



OM SYSTEM OM-5は、気軽に持ちだせる小型軽量ボディに、さまざまな撮影シーンで安心して使える防塵・防滴保護等級 IP53、-10℃の耐低温性を備えたミラーレス一眼カメラです。「有効画素数 2037 万画素 Live MOS センサー」や高性能画像処理エンジン「TruePic IX」により、自然な階調表現と高感度時でもノイズの少ない高画質が得られます。高いフレーミングの自由度と精度を両立させた 121 点オールクロス像面位相差 AF センサーを搭載し、ピント合わせが難しい天体撮影でも「星空 AF」により、高精度のオートフォーカス撮影が可能です。また、対応レンズとの組み合わせによる「5 軸シンクロ手ぶれ補正」では最大 7.5 段のぶれ補正効果が得られます。「5000 万画素手持ちハイレゾショット」「ライブ ND」など多彩な「コ

ンピュータショナル フォトグラフィ機能」を搭載、撮影者の創作意欲を刺激するカメラです。

【問い合わせ先】

OM デジタルソリューションズ株式会社

OM SYSTEM PRO SERVICE 鳥居

TEL: 03-3466-2951

(10:00-18:00 火・水定休)

メール: pro_support@om-digital-solutions.com

<https://jp.omsystem.com/>

キヤノンマーケティングジャパン

EOS R6 Mark II 世界は新たな映像表現の可能性と出会う



EOS R6 Mark II は、EOS R3 で採用したトラッキング（追尾）システムのコンセプトを

継承し、ディープラーニング技術の活用により被写体の特徴情報を抽出する能力が向上しました。人物/動物/乗り物の動体に対して、検出性能やトラッキング機能が大きく進化しています。

特に、人物撮影で高精度なピントが得られる瞳への AF が進化。あらかじめ瞳検出での「右目優先」「左目優先」「自動」の設定が可能になりました。さらに横顔、顔の陰影、マスク装着時などでも瞳を捕捉。頭部検出においては、スキーやスノーボードなどの、ゴーグルで顔が検出できないような被写体にも対応できます。また、「動物優先」に「馬」が、「乗り物優先」に「鉄道/飛行機」が追加され、より多様なシチュエーションでの撮影時に高い検出効果を発揮いたします。

電子シャッター使用時、最高約 40 コマ/秒の高速連続撮影 (AF/AE 追従) を実現。EOS R6 と比べ、コマ速が約 2 倍にアップしながらも、ローリングシャッター歪みはほぼ同等か、やや軽減しています。

さらに、解像感が向上した約 2420 万画素、常用 ISO 102400 の高画質・高感度 CMOS センサーを搭載し、手ブレ補正 (IS) 機構を搭載した対応 RF レンズとボディ内手ブレ補正の協調制御により最大 8.0 段の手ブレ補正効果を発揮することができます。プロのお客様のニーズにも応えられるよう、直感的な操作性と高い信頼性なども追求いたしました。

【問い合わせ先】

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

キヤノンお客様相談センター

TEL：050-555-90002

<https://cweb.canon.jp/eos/lineup/6dmk2/>

旭東エレクトロニクス

新賛助会員挨拶

「SUNEAST」を展開する旭東エレクトロニクスは、2017 年 8 月に大阪市西天満にて設立。2020 年 7 月より、ハイエンドカメラ向けメモリーカード「SUNEAST ULTIMATE PRO (サンイースト アルティメイト プロ) シリーズ」の開発&販売を開始し、現在ではさまざまなカメラメーカー様の推奨メモリーカードに選ばれ、また、「デジタルカメラグランプリ 2022」で 5 つのラインナップが 3 部門の金賞&受賞をいただきました。時流変化に伴い高画質なデジタル 120 連写や Apple ProRes422HQ の低圧縮記録ができるカメラが増えるなか、メモリーカードもその進化に合わせて買い換えなければなりません。撮影途中にカメラ側のバッファが詰まりシャッターがきれない、カメラ内部やメモリーカードの熱で撮影が停止するなど、最新のテクノロジーで作られた弊社のメモリーカードがこれらの問題を解決します。

【問い合わせ先】

株式会社旭東エレクトロニクス

担当：鶴

電話：03-6435-1528

メール: tsuru@suneast.co.jp

<https://suneast.co.jp/>

長野クリエイション

新賛助会員挨拶

心を込めてお手伝いさせていただきます！

この度は JPS 賛助会員に迎え入れて頂いた事にあらためて感謝申し上げます。私たち長野クリエイションは北アルプスの麓に店舗を構え、弊社の業務といたしまして撮影機材などの、修理・買取・販売事業を全国の写真業のお客様を対象に行っております。昨今、フィルム時代に活躍していたカメラやレンズがまた再び世界中のフィルム愛好家から注目を浴びております。日本写真家協会の皆様のもとで役目を終えた機材を私たちが一点一点心を込めて再生し、新たなシーンで再び機材が活躍できるようお手伝いをさせていただければ幸いです。ご用命いただければ全国の会員の皆様のもとへ出向き、機材の整理のお手伝いをさせていただきます。機材の事でそれ以外の事でも何でもお気軽にご相談ください。何卒、宜しくお願い申し上げます。

【問い合わせ先】

株式会社長野クリエイション

担当：宮田

TEL：0263-87-5521

(構成 / 出版広報委員：川上卓也)

2022年度「フォト・ジャーナリズム論」講座報告

共催事業：専修大学、公益社団法人日本写真家協会

2010年専修大学が開講した「フォト・ジャーナリズム論」(旧：報道写真論、山田健太教授担当)は、公益社団法人日本写真家協会との共催事業であり、当協会は、2011年から講師を派遣してきた。この講座は「学生たちの真実を見抜く目を育て批評力と行動力を養うことを目的とし、メディアの第一線で活躍する写真家や実務者の実作と体験談をもとに、いまメディアの現場で何が起こっているかを理解してもらうこと」を方針としている。

2022年度は高橋智史と米田堅持両氏を派遣した。会場は、川崎市多摩区の専修大学生田キャンパス。

●高橋 智史

2022年4月12日～5月24日(6回+1)

約100人の受講生に対して、対面形式での授業を行った。授業の進め方としては、パワーポイントにまとめた作品をプロジェクターで投影し、一枚一枚の作品を見もらうスライドトーク形式とした。6回を教室での講義に、1回を自主的な写真展見学として構成した。

第1回目は、私自身がフォトジャーナリストを志した経緯と、日本大学藝術学部写真学科在籍時に撮影したカンボジアの「ごみ山に生きる子どもたち」の作品群を紹介しながら、同国の背景と、現場で感じた心の葛藤、取材をさせていただく前の、心構えを紹介しながら、フォトジャーナリズムの意義について説いた。

第2回目は、「写真を読み解いていくこと」を軸に、カンボジアに生活拠点を移した2007年からの作品を中心に授業を構成した。凄惨な歴史と対峙し、懸命に生き抜いてきた人びとの物語を紹介し、「人間・戦争・平和」を考察してもらう授業を目指した。

第3回目は、最も長い取材テーマの一つ、カンボジアの「トンレサップ湖」に生きる湖上生活者の生涯を見つめ続けた写真群を紹介しながら、長期にわたる関係性の中で得られたエピソードを多く交え、「生と死」の意味を問いかけた。

第4回目は、37年間首相の変わらぬカンボジアの強権体制の中で、「フォトジャーナリズムが果たすべき役割」をテーマに、独裁を強める政権の弾圧に、自由と民主を求め、命をかけて立ち向かう人びとの姿を伝えた。全身全霊をかけてシャッターを切ってきた内容になり、「助けるとは何



キャンパスで講義中の高橋智史氏



か？」を、受講生と共有する授業とした。

第5回目は、報道の自由の現状を、「国境なき記者団」の「世界報道自由度ランキング」の資料を基に、カンボジアで経験してきたメディア弾圧の事実を伝えた。そして、世界が幾度も直面している「難民」の現状を、「アルペナンみんセンター」スタッフの漆原比呂志さんにオンラインを通じてご紹介いただき、その問題を受講生に投げかけた。

そして、講義最後の第6回目は、課題として設定していた「今伝えたいこと」をテーマに、受講生が大型連休中に撮影した作品の中から15枚をセレクトし、写真に込めた思いを分かち合う総括的な講義を行った。授業の後、「フォトジャーナリストになりたい」と思いを伝

高橋 智史(たかはし・さとし)

フォトジャーナリスト。1981年秋田県生まれ。日本大学藝術学部写真学科卒。大学在学中の2003年から、カンボジアでの取材を開始。卒業後の2007年から2018年まで同国の首都プノンペンに在住し、社会問題を集中的に取材。弾圧に抗う女性たちの姿をまとめた「屈せざる女性たち・カンボジア・変革の願い」で第10回「名取洋之助写真賞」。近年のカンボジア取材の集大成として発表した写真集「RESISTANCE カンボジア 屈せざる人々の願い」で第38回「土門拳賞」を受賞。公益社団法人日本写真家協会会員。

オフィシャルサイト：<https://www.satoshitakakashi.info>

えてくれた学生や、自らの写真作品を丁寧に見せてくれた学生もいて、心強く感じた。受講生のリアクションペーパーは徐じよに熱量を増し、その文脈には悩みと葛藤が刻まれながら、フォトジャーナリズムの持つ力が人を結びつけ、社会を動かす一助と成り得る可能性があることを、感じ取ってくれたような感想も多かった。いつか、どこかの取材現場で彼らと再会できることを願いながら、全日程を締めくくった。

●米田 堅持

2022年6月7日～7月12日(6回)

新型コロナウイルス感染症の流行に伴う「緊急事態宣言」や「まん延防止等重点措置」が発令されていない状況下ではあったが、広い教室において講師、学生ともマスクを着用し感染防止措置に務めながらの講座となった。

講座前には北海道知床沖での観光船沈没事故があり、また講座終了を前に安倍晋三元首相銃撃事件があり、数十年に一度あるかないかの大ニュースが飛び交う中、新聞社のウェブ編集部門に在籍する者として、ニュース報道の現実を伝えることに腐心した。



キャンパスで講義中の米田堅持氏

講義前の課題、講義後のリアクションペーパーの提出に加え、講義中には、ただ教材を読み上げるのではなく、積極的に学生の中に入って対話することで、学生自身にも一緒に考えて講座を作り上げることを重視した。学生と向き合って感じたのは世代間ギャップ以上に、ニュースの現場のイメージが一部のテレビ報道やウェブ媒体などの影響が強く、一般的な新聞や通信社、テレビの報道における「こだわり」や「配慮」などが伝わっていないことだった。リアクションペーパーは各回とも3回は目を通し、学生のニーズや疑問を把握し、質問に答える形で、誤解を解き、理解がされるように講義を進めていった。

講義の中では、私が30年以上前に大学で師事した三木淳元会長の言葉も交えながら、キャプションの持つ重要性、被写体に向き合う時の姿勢といった撮影以前の心構えを説いた。私自身が海上保安庁をライフワークとしていることから、海上保安庁と海上自衛隊の違いといったことを説明しながら、取材対象への理解を深めることが写真でも記事でも大事であるということ伝えた。

また、フォトジャーナリズム論ということから、自分



のスマートフォンのレンズの汚れを確認してもらったり、学生に担当の山田健太教授が話している様子を撮

米田 堅持(よねだ・けんじ)

1969年東京都生まれ。1992年3月 日本大学芸術学部写真学科卒。92年4月に毎日新聞社入社、東京本社写真部配属。中部本社写真部や横浜支局などを経て、デジタルメディア局でネットニュース向けの乗り物系を担当、ボーイング787導入やジャンボジェット引退、三陸鉄道復旧などで数かずのYahoo!ニュースのトピックスストップを獲得した。現在は編集編成局コンテンツ編成センターでウェブニュースの編集などを担当。ライフワークとして海上保安庁。主な写真展に「SPEED SMART SERVICE」写真集『海上保安庁』、「海を守る船と人と翼、写真集『海上保安庁』など。公益社団法人日本写真家協会会員。

影したり、実際に自分が撮影した写真を使った課題も提出してもらうことで、ただ聞くだけではなく学生自身が主体的に取り組むように仕向けることも心掛けた。

講義を振り返ると、学生から見たら親のような世代である自分にとって「若い人」のイメージはあっても実際のところはまるで理解できていなかったことを痛感するとともに、伝えることの難しさを実感した日びでもあった。

最後に、時どき「脱線」という声も上がる中、100人もの学生の前で話す機会を用意してくださった山田先生、講義をサポートしてくれた助手の李さんに心から感謝を申し上げます。

(写真提供/専修大学 構成/小池良幸常務理事)

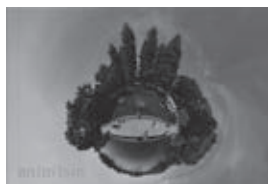
講師派遣歴

2011年度: 桑原史成	
2012年度: 長倉洋海・英 伸三	2013年度: 宮嶋茂樹・樋口健二
2014年度: 大石芳野・山本皓一	2015年度: 清水哲朗・石川文洋
2016年度: 桃井和馬・石川 梵	2017年度: 宇井真紀子・広河隆一
2018年度: 公文健太郎・竹沢るま	2019年度: 小松健一・前川貴行
2020年度: 新型コロナウイルス感染症拡大のため休講	
2021年度: 渋谷敦志・小澤太一(敬称略)	



協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載致します。
(2022年7月～2023年1月)

- ①発行所
 - ②発行年月
 - ③サイズ
(タテ×ヨコ)、頁数
 - ④定価
 - ⑤寄贈者
 - ⑥電子書籍ストア
- 本紹介／出版広報委員・池口英司



animism
野田知明

- ①野田知明 ②2022年7月
- ③21 × 30.8cm、22頁 ④－円
- ⑤野田氏

360度写した画像を地図の投影法で描くことで、目の前に広がる情景を一つの球体のように描き直してみせた作品集。シークエンスとして並べられた花壇、東京タワーなどの情景に、不思議な生命感が宿っている。



これ、なーんだ?
写真・今井しのぶ

- ①マイルスタッフ ②2022年8月
- ③16.7 × 15.3cm、36頁
- ④1,500円 ⑤今井氏

イチゴ、リンゴ、アスファルトなどの一部をアップで掲載。次のページにその全体像を載せ、種明かしとする写真絵本。タイトルからも想像できるように子どもと一緒に楽しむクイズ集の形だが、大人にも発見がある。



ヒロシマ・コレクション
土田ヒロミ

- ①JCI フォトサロン
- ②2022年7月 ③24 × 25cm、31頁 ④1,000円 ⑤発行所

広島平和記念資料館に所蔵された被爆者の遺品などを撮影した写真を収録。焼けただれ、変形した衣服、弁当箱、水筒、人形などの姿に、原子爆弾被爆時の人々の暮らしを偲ぶことができる。2022年夏に開催された写真展の図録。



シブヤ Shibuya
高橋康資

- ①日本写真企画 ②2022年8月
- ③20 × 22.5cm、96頁
- ④2,000円 ⑤高橋氏

若者の街として今なお急激な変貌を続ける渋谷の、駅周辺に広がる光景を収録。昼夜を問わず多くの人が行き交う混沌の中に、現代という時代が描かれている。乱雑に貼られたポスター、光輝くショーウィンドーが印象的だ。



EXISTENCE Forests of Karuizawa
山口一彦

- ①インテリアアート / 出版
- ②2022年6月 ③25 × 18.2cm、98頁 ④2,500円 ⑤山口氏

軽井沢に広がる森の姿をモノクロームによって記録。この地の森は自然林と植樹の森が混在すると著者は語るが、森の奥には、俗化とは無縁の深い静寂がある。1本の木、1枚の葉に、愛おしい生命が宿っている。



三浦綾子 祈りのことば
写真・おちあいまちこ

- ①日本キリスト教団出版局
- ②2021年6月 ③19 × 14.8cm、80頁 ④1,200円 ⑤おちあい氏

クリスチャン作家として知られた三浦綾子の、数々の祈りの言葉に、花、雪、海、霧などを捉えたネーチャーフォトを合わせている。爽やかな写真と、三浦の優しい言葉が、読む者に心地よいひとときを提供する。



FORME
喜多規子

- ①風景写真出版 ②2022年9月
- ③22.5 × 29.7cm、104頁
- ④3,300円 ⑤喜多氏

凍てつく落葉、木漏れ日、波静かな湖面などに、著者が「偉大な芸術家」と形容する自然の中の造形を拾う。横開きでゆったりとレイアウトされた1枚1枚の写真が、雄弁に語りかけるようにして、見る者の心を掴む。



現代を走るくろがねの勇姿たち
国内蒸気機関車の魅力

都築雅人

- ①天夢人 ②2022年9月
③25.7 × 18cm、144頁
④2,500円 ⑤発行所

今は全国の数か所のみで運転されている動態保存と呼ばれる蒸気機関車の作品集。北海道から九州まで、四季それぞれの情景を取めた力作と呼びたい一冊。巻末では蒸気機関車を収蔵する博物館を紹介している。



日本の鉄道 路線と車両の
大図鑑 私鉄編

櫻井 寛

- ①講談社 ②2022年9月
③14.8 × 10.5cm、368頁
④1,500円 ⑤櫻井氏

小さな判型に全国の鉄道の情報をぎゅっと詰め込んだガイドブック。各路線の概要、それぞれの路線で運転されている代表的な車両を紹介。随所に挿入された路線図が、楽しい彩りとなっている。



わたしの心のレンズ
現場の記憶を紡ぐ

大石芳野

- ①集英社インターナショナル
②2022年6月 ③17.3 × 10.8cm、
264頁 ④900円 ⑤大石氏

世界を舞台にドキュメンタリー写真を撮り続けてきた著者の随想集。社会の分断が進み、人々がなおも苦しい生き方を余儀なくされている中で、過去の日々を振り返り、これからの世界のあり方を考える。



琵琶湖の原風景と
湖畔の人々

マツシマススム

- ①日本写真企画 ②2022年9月
③24 × 26cm、144頁
④4,500円 ⑤マツシマ氏

1964年から撮影された琵琶湖周辺の写真を収録。書籍を二部構成とし、前半をオーソドックスな風景写真で、後半を社会性のある写真で構成。日本を代表するこの湖も、時とともに変貌が続いている。



鉄道150周年記念
蘭部澄が写した「汽車の窓からー東海道ー」

蘭部 澄

- ①JCII フォトサロン
②2022年10月 ③24 × 25cm、
31頁 ④1,000円 ⑤発行所

日本を代表する写真家として活躍した著者が見た1950年代の日本の鉄道風景。特急停車駅も、限られた人だけが利用した1等車も、贅を凝らして造られた食堂車も、現代とは異なる質素な姿であった。



野生の輝き
Glorious world of wildlife

吉野 信

- ①吉野 信 ②2022年5月
③21 × 29.7cm、72頁 ④-円
⑤吉野氏

アフリカ、アラスカ、北アメリカ、そしてもちろん日本など、世界で撮影した野生動物たちの、力に満ちた姿を一同に収める。鋭い目つきの大型獣も、愛らしい小動物も、大自然の中では、同じ重みを持って生き続けている。



写真家瀬尾太一
全仕事

瀬尾太一

- ①日本写真企画 ②2022年10月
③29.7 × 21cm、148頁
④3,000円 ⑤発行所

営業写真館で活躍する傍らで、ライフワークとして身の周りの世界を記録し続けてきた著者の遺作集。モノクロームによる下町、能、住居、香港、バリ島などの海外風景など、いくつものテーマでページを構成。それぞれに味わいの異なる写真群を鑑賞できる。



響煙
蒸気機関車写真集

持田昭俊

- ①イカロス出版 ②2022年10月
③25.7 × 18.4cm、72頁
④1,800円 ⑤持田氏

現代を走る動態保存の蒸気機関車だけを採り上げた作品集。機関車の部分アップの写真あり、シルエットのみの写真ありという具合に、一般的な鉄道写真とは一風異なる芸術性の感じられる写真を数多く収録する。



中国・ロシアに 侵される日本領土

山本皓一

- ①小学館 ②2022年11月
③21×15cm、224頁
④2,000円 ⑤山本氏

日本の辺境に位置し、複雑な政治的意義が備えられている尖閣諸島、北方領土、沖ノ鳥島／南鳥島、竹島について、その現況を報告し、「国民が立ち入ることのできない領土」の存在意義を考える。巻頭に現地の写真を多数収録。



屋根のうえの バトンリレー

横塚眞己人

- ①ほるぷ出版 ②2022年10月
③26.5×20.5cm、41頁
④1,600円 ⑤横塚氏

西表島のかや吹き屋根の家を舞台にして、屋根の吹き替え作業の一部始終を追う。漢字にルビが入れられた子ども向けの絵本の体裁を備えた書籍だが、自然と人間の関わり方はいかにあるべきかという深いテーマが見え隠れする。



アイヌモシリ オオカミが見た北海道

水越 武

- ①北海道新聞社 ②2022年11月
③24×25cm、204頁 ④5,500円
⑤発行所

自然をメインテーマとしてきた著者の、北海道の作品を集成する。山岳、河川、湖沼、生き物たち、ジオヒストリー、天空といったテーマにわけて10章を構成。雄大な風景、極限に生きる動物の可憐な姿を追う。



新幹線撮影 コンプリートガイド

大鶴倫宣

- ①イカロス出版 ②2022年7月
③29.7×21cm、138頁
④2,000円 ⑤大鶴氏

作例と撮影地の地図を併載する撮影地ガイド。高架上に線路があることが多い新幹線は、撮影が難しい被写体だが、著者の献身的ともいいたくなる努力によって、魅力的な撮影地が数多く再発見されている。



歴史と文化とミステリー！ 東京の鉄道の謎を探る

結解 学、渡部史絵

- ①天夢人 ②2022年11月
③21×14.7cm、176頁
④1,800円 ⑤発行所

東京を23区と多摩東部、多摩西部などに分け、地区ごとに鉄道の歴史を追った読み物。今も残る煉瓦造りの鉄道橋など、その由来を知れば、東京という町の歴史、日本の鉄道の歴史にさらに興味が湧くことだろう。



スペイン ひと・まち・ひと

佐藤哲也

- ①新潮社 ②2022年11月
③26.5×18.7cm、160頁
④3,000円 ⑤佐藤氏

80年代以降のスペインで撮影されたスナップ作品集。「人びとの息づかいが感じ取れることに重点を置き」と著者が語る本書のテーマは人。降りしきる雪の中を急ぎ足で通り過ぎる人々など、随所に印象的なカットが掲載されている。



超人！奇人？鉄道偉人伝

池口英司

- ①イカロス出版 ②2022年12月
③21×14.8cm、274頁
④1,800円 ⑤池口氏

日本の鉄道建設に尽力した偉人10人を探り上げた人物評伝。十河信二、五島慶太など、誰もが知っているであろう人物が登場する。誰もが一度は逆境に追い込まれながら、それを跳ね返してゆく過程が本書の読みどころだろう。



Pearl Harbor —海の彼方の戦争遺跡—

尾辻弥寿雄

- ①新日本出版社 ②2022年11月
③26.8×19cm、112頁
④3,400円 ⑤尾辻氏

太平洋戦争開戦の舞台となったハワイ・真珠湾の現代の姿を報告するルポ的な色合いの濃い作品集。世界的な観光地として知られ、降り注ぐ明るい陽光の中で、人々は屈託のない姿を見せるが、戦争の傷跡は、今なお随所に残されている。



東京・下町日和
—平成から令和へ—

浅井秀美

① 東宝出版 ② 2022 年 12 月
③ 22.7 × 19.5cm、318 頁
④ 3,800 円 ⑤ 浅井氏

浅草、上野、築地、隅田、勝どきなどに住む人々の日常の暮らしを追った作品集。撮影は平成から令和の時代に行われているが、オールモノクロの構成によって、昭和時代を思わせる空気が醸し出されている。



シベリア収容所 1992

野町和嘉

① クレヴィス ② 2022 年 10 月
③ 29.2 × 21.8cm、112 頁
④ 3,000 円 ⑤ 野町氏

ソビエト連邦が崩壊した直後の 1992 年に、極東の 2 つの収容所で撮影された作品を集める。登場する人の姿はどれも健気で、それゆえに美しい。政治という巨大な潮流の中で、一人一人の存在はあまりにも小さく見える。



昭和の琵琶湖と
湖畔の人々

マツシマススム

① マツシマススム ② 2023 年 1 月
③ 26.5 × 19.5cm、60 頁 ④ - 円
⑤ マツシマ氏

著者がアマチュア時代だけにのみ撮影していたというモノクロ写真による琵琶湖周辺の風景写真を収録。1978 年までに撮影された写真のみで構成され、今日の目には隔世の感のある、琵琶湖周辺ののどかな風景を楽しめる。

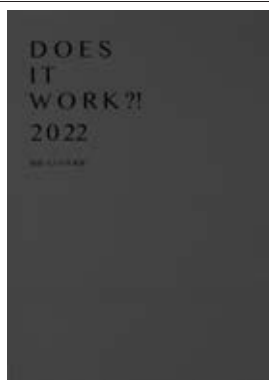


第 5 回 JPS 会員有志
関西展 作品集

JPS 会員 85 名

① 第 5 回 JPS 会員有志関西展 実行委員会 ② 2023 年 1 月 ③ 29.7 × 21cm、117 頁 ④ 2,000 円 ⑤ 四方伸季氏

2023 年 1 月から 2 月にかけて開催された第 5 回 JPS 会員有志関西展の図録。展示会の性格から、出展された作品は実にさまざまなテイストを有しているが、その混沌とした風情に勢いが感じられ、楽しい。



DOES IT WORK?! 2022
関西・9人の作家展

生原良幸・小林正典・平寿夫・森田敏隆・
師岡清高、他 4 名

① 写真家 9 人 ② 2022 年 12 月
③ 29.7 × 21cm、44 頁 ④ - 円
⑤ 平氏

9 名の有志によってリリースされた作品集。風景、人物、舞台など、被写体はさまざまだが、どのフォトグラファーにも高い技量が感じられ、見えて心地の良い写真が並べられている。



成都 拌飯 まぜごはん

石川裕修

① 三恵社 ② 2023 年 1 月
③ 20.5 × 20.5cm、52 頁
④ 2,600 円 ⑤ 発行所

中国の成都を舞台にした作品集。「まぜごはん」というサブタイトルがつけられているように、風景ばかりでなく、人物、食品など、実にさまざまな被写体が登場する。その混沌にも、現代の中国の世情が反映されている。



写真で振り返る東京風情
路面電車がみつめた 50 年

諸河 久

① 天夢人 ② 2023 年 1 月
③ 25.7 × 18cm、160 頁
④ 2,700 円 ⑤ 発行所

この 50 年の都電の変遷を追う。単に車両の姿を収めた作品集に留まらず、過去のさまざまなエピソードを振り返り、事の顛末について、考察、謎解きを進める。一見聞きごとに存分な見応え、読み応えがあり、鉄道ファンでなくとも楽しめる。



写真・東京暮色

小柴一良

① 工房 草土社 ② 2022 年 11 月
③ 29.7 × 20.8cm、210 頁
④ 3,800 円 ⑤ 小柴氏

東京都心で拾った建築、人、自然の姿を収めたモノクローム作品集。ローキーの写真がずらりと並ぶ姿に、現代の都市が抱える憂鬱が滲み出ているかのようだ。何気ない一コマも、何年か後には、貴重な記録、証言となることだろう。

寄 贈 図 書

南佐和子様……………カメラと旅するアイスランド 北欧絶景ガイド
島田 実様……………長谷川浩一・島田実・山下郁夫・市谷健・節政博親・
VIVANTS
立木寛彦様……………編集・立木寛彦、他
霞ヶ浦帆引き船フォトコンテスト 20 回記念写真集 (2001-2021)
船尾 修様……………The Great Indus、満洲国の近代建築遺産
矢崎 進様……………毎日新聞写真部 OB 会・目撃者たちの記憶
JCII フォトサロン様……………間世潜・トラピスチヌ大修道院
……………井桜直美・写真と絵画でおりなす 下関蓮杖の世界 Part2
……………本間鉄雄・情熱とモダン、桑原甲子雄、濱谷浩・東京 1930 年代
……………井桜直美・ステレオ写真に浮かび上がる幕末-明治の日本 Part I
Rossier & Burger & Metcalf

東京都写真美術館様……………イメージ・メイキングを分解する
……………見るは触れる 日本の新進作家 vol.19、野口里佳・不思議な力
東京ステーションギャラリー様……………鉄道と美術の 150 年
新日本出版社様……………船尾修・日本人が夢見た満洲という幻影
……………中国東北部の建築遺構を訪ねて
二科会写真部様……………第 70 回展二科会写真部作品集
日本写真協会様……………日本写真年報 2022
風景写真出版様……………永田京子・Blue、高橋清・Swan Scape
ふげん社様……………王露・Frozen are the Winds of Time
……………制作・PCT・写真 Sha Shin Magazine 3
双葉社様……………監修・櫻井寛、作画・はやせ淳・新・駅弁ひとり旅 4
りぼん舎様……………松本洋子・Au Pays de la Lumière 光の国へ
……………S.Kawanago・大阪-東京 OSAKA TOKYO
……………赤瀬川原平・1985-1990 赤瀬川原平のまなざしから
JAGDA 様……………JAGDA 国際学生ポスターアワード 2022 図録
東京写真記者協会様……………第 63 回 2022 年報道写真展 記念写真集

受賞おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。



■「関西写真記者協会 協会賞」受賞 2022年12月12日

受賞者：藤井博信（2001 年入会）

安倍元首相銃撃事件で歴史的な一瞬を撮影した「安倍元首相銃撃犯確保」に対して。

2023 年 第 18 回「名取洋之助写真賞」作品募集

社会の動向に鋭い視線を投げかけ、情熱を燃やす新進写真家へ！

公益社団法人日本写真家協会が公募する 2023 年 第 18 回「名取洋之助写真賞」

今回より、応募資格が 40 歳まで、賞金 50 万円となりました。

公益社団法人日本写真家協会は、「新進写真家の発掘と活動を奨励する」ために、40 歳までの写真家を対象とした 2023 年 第 18 回「名取洋之助写真賞」の公募を行います。若い写真家を元気づける「名取洋之助写真賞」はプロ写真家への登竜門として創設しました。

時代を捉える鋭い眼差しと豊かな感性による、斬新な作品を期待します。
お知り合いの若い写真家に是非、応募をお勧めください。

2022 年 第 17 回名取洋之助写真賞：該当者なし



2022 年 第 17 回名取洋之助写真賞奨励賞：
鄒楠「燕郊物語-中国の白血病村」

【第 18 回 応募要項】

- 応募期間：2023 年 7 月 1 日（土）～ 8 月 20 日（日）消印有効。
持参の場合は 8 月 18 日（金）午後 5 時まで。
- 応募資格：応募者は 40 歳まで（1983 年 1 月 1 日以降生まれ）の方で、プロ、アマチュアは問いません。
- 提出作品：六ツ切または A4 サイズの同一テーマの作品 30 点。
- 応募規定：詳しい応募規定は 2023 年 第 18 回「名取洋之助写真賞」作品募集のホームページをご覧ください。
- 選考委員：山田健太（専修大学教授）、野町和嘉（写真家・日本写真家協会 会長）、清水哲朗（写真家・日本写真家協会 会員）。（予定）
- 表彰・賞金等：名取洋之助写真賞 1 名・賞金 50 万円、名取洋之助写真賞奨励賞 1 名・賞金 10 万円、東京、大阪で受賞作品 写真展の開催、授賞式。
- 著作権・使用権の許諾：受賞作品の著作権は撮影者に帰属します。受賞作品は受賞後 2 年間、主催者（日本写真家協会）が名取洋之助写真賞の広報・宣伝活動に優先して使用します。ただし、その後も協会の PR 活動や歴史展、沿革史等に掲載させていただくことがあります。データは上記目的以外には使用いたしません。
- 提出・送付先：書留郵便または宅配便（送料は応募者負担）または持参。
〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 番地 JCII ビル 303 公益社団法人日本写真家協会「名取洋之助写真賞」係
TEL：03-3265-7451 FAX：03-3265-7460
- 応募用紙は JPS ホームページ <https://www.jps.gr.jp/> から



笹本 恒子 名誉会員

2022年8月15日、老衰のため逝去。107歳。(1950年入会)
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

笹本恒子さんは、1940年財団法人写真協会に入り、日本最初の女性報道写真家としてスタートされました。1947年からフリーとなり、新聞・雑誌などに写真・記事を提供してきました。1950年、創立会員としてJPSに入会し、女性の視線で様々な社会現象を捉え報道写真家として長く活動が続けられ、2000年名誉会員に推挙されました。

追悼 笹本恒子

松本 徳彦

8月21日朝、創立会員で名誉会員の笹本恒子さんが「15日、鎌倉の介護ホームで静かに息を引き取りました」との一報を姪の野村エミ子さんからいただいた。驚いた。9月1日が108歳の誕生日で、お祝いをしようと計画されていた矢先のことで、関係者の落胆ぶりが目に浮かぶ。

笹本さんは1914(大正3)年、東京品川区で生まれる。9歳の誕生日に関東大震災で被災(23年)。31年、大妻芸芸学校高等家政科を経て、36年東京日日新聞(現・毎日新聞)で新聞の挿絵を描く。38年、内閣情報部が対外写真宣伝をするために財団法人写真協会を設立し「写真週報」を発行。同協会の新聞記者・写真家の林謙一から39年、報道写真家の誘いを受ける。40年、初の女性報道写真家として活動を始める。翌年退社するまで、日米学生会議、日独伊三国同盟婦人祝賀会、ヒトラーユグメントとの交歓行事を撮影。41年、結婚し家庭に入る。45年敗戦、疎開先の千葉新聞社に入社。帰京後、『婦人民主新聞』の嘱託に。47年フリーランスとなり、新聞、雑誌などに写真と記事を提供するなど活動が本格化する。50年、進駐軍兵士婦人をモデルにした「生きたニュールック写真展」を丸善ギャラリーで催し、大勢の観客で賑わう。この年創設した日本写真家協会の創立会員となる。

68年、以前から行きたかった憧れのパリなどヨーロッパ8カ国を歴訪。フラワーデザインの仕事と視察旅行が目的で、写真は町のスナップ、パリ在住の日本人芸術家たちや日常を撮る。フリーの強みで勝手気ままな写真を撮り雑誌で発表。「パリでは大好きな赤ワインにカマンベールチーズ、それにお肉が、健康の秘訣よ」というのがインタビューでの語り草。

笹本さんの若い時の特技は絵を描くこと。好奇心旺盛で、丹念な観察はそのころ培われている。そこから生み出された撮影術は素直、素朴そのもので対象の人物などたらえる術が身についている。

笹本さんの著書は何冊になるのだろうか。亡くなる直前まで書かれていたものもあるとか。

2017(平成29)年には、ご親族の尽力により、JPSに笹本さんから写真家を支援する基金による「笹本恒子写真賞」が設けられ、第1回受賞者の宇井真紀子さんを筆頭に5人の受賞者が生まれている。

昨年はニューヨークのメトロポリタン美術館で、「The New Woman Behind the Camera」Andrea Nelson ほかが催した写真展が開かれた。館の外壁には笹本さんがグラフィックカメラを構えた巨大な写真が貼り出され、人目を引いた。本展については米国人のケイト・クリッペンステインさんの協力があったことを付記する。



芳賀 日出男 名誉会員

2022年11月12日、老衰のため逝去。101歳。(1950年入会)
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

芳賀日出男さんは、日本国内・世界101カ国のお祭りなど民俗行事を訪ね歩き、民俗写真の立場を確立しました。また、日本や世界の祭りに精通していることで、1970年大阪万博(お祭り広場)のプロデューサーを務められ、紫綬褒章、勲四等旭日小綬章、日本写真協会賞功労賞などを受賞されました。1950年に創立会員としてJPSに入会、1981年から8年間副会長を務められ、1993年名誉会員に推挙されました。

転機となった芳賀先生との出会い

関口 照生

芳賀先生! 2020年以降のコロナ禍ですっかりご無沙汰しているうち、思いがけなくこのような文章を読める時が来てしまいました。

先生に初めてお会いしたのは1963年。広告写真を担当していた銀行から「翌年のオリンピックに向け世界をテーマにした企画を」との依頼があり、芳賀先生の「世界の祭り」を提案しました。当時の先生は、民俗学の立場から世界各国の祭りを記録する先駆者としての写真家でした。企画が採用され、一面識もない先生のお宅を訪ねたのです。

先生は世界の祭りに疎い僕に丁寧に説明してくださり、12カ月のシリーズを組んでくださいました。その著らない態度と優しい言葉遣いに感動し、その後は事あるごとに押しかけ、勝手に弟子を決め込み、祭りの起源や諸外国の話を数々伺いました。楽しみでもあり、貴重な学びの時間でもありました。

次第に「外国を旅してみたい、世界を知りたい」と思うようになっていました。どうしたら外国へ出て行けるのかと尋ねたところ、先生は「思い続けることです。そうすると、その思いを叶えるために何をすべきか自然に考えるものです。いつも心の片隅に置いて思い出そうにしてください」と仰いました。

オリンピックが目前に迫り、世界がより身近に感じられるようになった頃、先生から「どうです。まだ外国に行きたいと思っていますか」と声をかけられました。即座に「はい!」と答えると「そうですか。それなら一年かけて資金を貯めてください」と言われました。しかし、努力

はしたものの予定の額には至りません。一年はあつという間に過ぎ、先生から再度、問われた時、「すみません。やっと半分程度です」と答えました。「努力はなさったのですね。では、旅費の半分は私が用立てましょう。ただし、条件があります。妻の杏子がヨーロッパ旅行をしたいと言っています。1カ月ほどボディガードをしつつ撮影法を教えてやってください。その後はご自分の旅を続けて結構ですよ」と。1965年2月のことですが、感激で言葉が出ませんでした。

先生、これが僕の写真人生のターニングポイントになりました。そして、二度目の外国の旅でパリのプチホテルで偶然に出会った折には、ワイングラスを手に「出会いと旅はいいですね。いろいろと学べます」と語られました。そうです、先生。僕にとって今でも「旅は学校」です。

その後、祭りや旅に専念することなく写真を撮り続けてきましたが、50歳を過ぎる頃から、世界の少数民族や各地の固有の風土に生きる人々を写真や映像で作品として発表してきました。先生が敷いてくださったレールから外れた不肖の弟子ですが、今も少しずつそのレールに戻るよう努めています。そしてまた、先生から頂いた心に響く言葉の数々を、今度は僕が若い世代に伝える歳になりました。本当に長きにわたり公私にもお世話になりました。有難うございました。

本来であれば、先生の写真界での多くの業績を綴るべきではありませんが、敢えて僕からのお礼の言葉で惜別の思いに代えることといたします。ご冥福をお祈りします。



佐々木 伸 正会員

2022年7月9日、すい臓がんのため逝去。67歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(2015年入会)



丹地 敏明 正会員

2022年8月12日、肺がんのため逝去。86歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1967年入会)



日高 勝彦 正会員

2022年9月17日、前立腺がんのため逝去。86歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1969年入会)



持田 和夫 正会員

2022年10月27日、肺炎のため逝去。89歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1981年入会)



岩橋 崇至 正会員

2022年11月28日、前立腺がんのため逝去。78歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(2012年入会)



岡部 浩二 正会員

2022年12月25日、肺がんのため逝去。75歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(2006年入会)

経過報告(2022年8月～2023年1月)

- ◎ 8月26日～9月1日 2022年新入会員展(大阪) 富士フィルムフォトサロン大阪 出品者18名、作品数54点、入場数2,440名 ○「私の仕事」
- ◎ 8月31日 2022年第17回名取洋之助写真賞作品選考会 PM1:30～4:00 JCIIビル会議室 15名
- 選考・山田健太、清水哲朗、野町和嘉、応募者・9名10点、名取洋之助写真賞・該当者なし、奨励賞・郷土「燕郊物語～中国の白血病村」
- ◎ 9月5日 2022年度賛助会員への事業説明会 PM5:00～6:00 JCIIビル会議室 賛助会員16社18名、JPS18名(リモート参加含)
- ◎ 10月3日 第55回公益社団法人日本写真家協会理事会 PM4:00～4:50 JCIIビル会議室 18名、欠席理事1名、欠席監事1名(リモート参加含)
- 第1号議案:日本写真保存センター御徒町作業場の移転と人員整理に関する件
第2号議案:定款変更「特定事業目的資金の目的外取崩を理事会決定で可能とする規定整備」の件
第3号議案:公益社団法人日本写真家協会 入会規程の一部変更の件、他
- ◎ 10月12日 第2回技術研究会 PM2:00～4:30 JCIIビル会議室、オンライン 参加数32名 ○ミラーレスカメラ用交換レンズの魅力に出会う
- ◎ 10月17日 関西地区委員会オンラインセミナー PM6:00～8:00 オンライン 参加数80名
- 写真家のためのインボイス制度勉強会～インボイス制度について知る～
- ◎ 10月28日 日本写真保存センター2022年度第2回諮問委員会議 PM2:00～3:30 JCIIビル会議室 21名(リモート参加含)
- ◎ 10月28日 日本写真保存センター2022年度第2回支援組織会議 PM4:00～5:00 JCIIビル会議室 支援組織会員7社・1団体11名、

- JPS7名(リモート参加含)
- ◎ 11月5日～ 国際交流委員会企画「表現者たち」vol.11 JPS ホームページ
- 「光と影の物語 太陽と月をとらえる魔術師 インド人写真家・クルティク・タクル氏の「Light Meets Shadows」
- ◎ 11月12日 第16回JPSフォトフォーラム AM10:30～16:30 東京都写真美術館1階ホール 参加数合計273名
- 「自然と命を撮るということ」講演者・大竹英洋、中村卓哉、パネリスト・大竹英洋、中村卓哉、野町和嘉
- ◎ 11月20日 おやこ写真教室 PM1:00～4:30 (株)ケンコー・トキナー中野本社 セミナールーム&スタジオ 参加数6組12名
- ◎ 12月7日 第48回日本写真家協会賞贈呈式 PM4:30～4:45 アルカディア市ヶ谷
- 受賞者・株式会社ケンコー・トキナー
- ◎ 12月7日 第17回名取洋之助写真賞授賞式 PM4:45～5:00 アルカディア市ヶ谷
- 受賞者・郷土(奨励賞)
- ◎ 12月7日 第5回笹本恒子写真賞授賞式 PM5:00～5:20 アルカディア市ヶ谷
- 受賞者・西野嘉憲
- ◎ 12月7日 2022年度会員相互祝賀会 PM6:00～7:30 アルカディア市ヶ谷 参加数256名
- ◎ 12月22日～28日 第5回「笹本恒子写真賞」受賞記念展 アイテムフォトギャラリー「シリウス」 入場数496名
- 西野嘉憲写真展「狩りたてのもの」
- ◎ 1月20日～26日 2022年第17回「名取洋之助写真賞」受賞作品写真展(東京展) 富士フィルムフォトサロン東京 入場数5,046名

第48回2023JPS展 開催予定

〔東京展〕5/20(土)～5/28(日)

東京都写真美術館 B1F 展示室 開館時間 10:00～18:00(木・金は20:00まで) 月曜休館

〔関西展〕6/20(火)～6/25(日)

京都市美術館別館 2F 開館時間 10:00～18:00

animism(表紙写真)——野田知明

アニミズム(英語:animism)とは、生物・無機物を問わずすべてのものに靈魂、もしくは霊が宿っているという考え方。作品を作っていると、生命を感じる作品が出来る事が有ります。そんな作品の1枚です。作品はVRパノラマの可能性を模索する中から生まれました。360度を写した画像をメルカトルやステレオグラフィック、円錐図法といった地図の投影法で描く事で制作します。被写体を感じた生命感を強調しました。

写真集・写真展「animism」



屋根の上のニンガイ(表4写真)——横塚眞己人

沖縄県の西表島に築150年といわれる茅葺き屋根の住宅・新盛家があります。6~10年に一度の茅の葺き替え作業では、村人たちの手でマンガロープやヤシなどの植物を使って、昔ながらのやり方で行われるのです。その作業は伝統文化を伝えるためのものとなっています。茅の葺き替えが終わると、屋根の上に村人の代表者が集まってニンガイをします。ニンガイとは「願い」の事で、その家と土地の神様に住む人の健康を祈るのです。

写真集「屋根のうえのバトンリレー」



第48回2023JPS展 関連イベント

『第2回知っておきたい写真著作権&肖像権セミナー』

公益社団法人日本写真家協会／一般社団法人日本写真著作権協会 共催事業

【東京】

日時: 2023年5月21日(日)

会場: 東京都写真美術館ホール 1F ホール

講師: 午前の部: 吉川信之

午後の部: 大西みつぐ／山岸伸／棚井文雄

参加費: 無料

【関西】

日時: 2023年6月25日(日)

会場: 京都市勧業館「みやこめっせ」大会議室

講師: ハービー・山口／溝縁うろし／棚井文雄

参加費: 無料

その他のイベント:

5/26(金)18:30~20:30 「会員写真家によるポートフォリオレビュー」 東京都写真美術館 1F スタジオ

5/27(土)14:00~16:00 第2回技術研究会「組写真、テーマの見つけ方と表現」

〜ドキュメンタリーフォト、ルポルタージュフォトのために〜 東京都写真美術館 1F スタジオ

編集後記

◎満70歳を迎え、自治体から敬老特別乗車証(敬老バス)をいただいた。私の住んでいる自治体ではこのバスの提示で、路線バスと市営地下鉄がフリーで乗車できる。コロナ禍の行動規制で高齢者の介護認定率が上昇したとの報告もあり、頂いたバスを有効に利用して地域や人とふれあう機会を増やしていこうと思う。頭を使う路線バス乗り継ぎの旅も楽しみの一つだ。(小池)

◎本号の会報レイアウトが、これまでと少しですが、変わったページがあるのを、お気づきになったでしょうか?

口絵「JPSギャラリー」では作品と解説を1頁で掲載しました。これまでは、巻末近くに写真解説としてまとめてあったので、少し見にくかったのが、だいぶ改善されたと思います。また、「JPSブックレビュー」では、掲載写真集の内容を少しでも知っていただきたいと思い、編集委員による紹介文をつけました。

出版広報委員会では、常に改善を考えていかなければと思っていますので、「会報」へのご

意見を遠慮なくお寄せください。

(伏見)

コロナ腹)と格闘中。なかなか手強い。

(飯塚)

◎会報作りを通して、毎年何人ものフォトグラファーの方と会って、話をする機会に恵まれています。皆さんに共通しているのは、写真が好きで、ひたむきに仕事を続けていること。この資質こそ、私たちにとって最大の財産なのではないか、年を追うごとに、その思いが強くなっています。(池口)

◎数年前、入院し全身麻酔で左下の親知らずを抜いた。膿が溜まり顎の神経圧迫が進行中で、歯科医で簡単に抜歯とはならなかった。先日、硬いものを食べた勢いで、虫歯を治したカバーが歯の根元を痛める状態で外れ、レントゲンを撮った。今度は右下の親知らずの同じ状況が判明!保険は出るがまた入院か…。(小野)

◎コロナ禍がまだ完全に収まりきらない中、昨年後半から経済活動優先に舵が切れ、旅行も規制緩和された。昨年7月下旬に「コロナの餌食」になった私は、根拠のない「コロナは怖くない」状態。3年ぶりのアフリカ取材を計画し、ジムに通いながらこの3年で見事に成長した「コ

◎ここ数年、体調不良とコロナの影響により免疫力が下がっているため外出自体も控えるようにと医者の判断もあり、いろいろなことをセーブしなければいけなかった。今年はそんなこともなさそうと、いろいろと復帰準備を始めている。一番は体力が落ちたなあと。さあ、がんばろう。(川上)

◎数年前にスキーに行ったら、滑っている人の7~8割がスノーボードだった。もはやスキーは少数派。リフトに並んでいてもスキーヤーはなんとなく肩が狭い。こんなにゲレンデが変化していたとは。遅ればせながら、次回からスノーボードにチャレンジしようと思う。50の手習い。(山縣)

◎コロナ禍の意識もだんだん薄れてきて、いろいろな会合も開かれるようになりました。事務局では次回5月の定時会員総会の開催に向けてそろそろ準備を始めるところです。総会終了後の懇親会も計画に入ってますので、なにとぞよろしくです。(事務局 杉山)

日本写真家協会会報 第179号(年2回発行) 2023年3月10日 印刷・発行 ©編集・発行人 野町和嘉

URL <https://www.jps.gr.jp/> Email info@jps.gr.jp 本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

出版広報委員 小池良幸(常務理事)、伏見行介(理事)、池口英司(委員長)、小野吉彦(副委員長)、飯塚明夫、川上卓也、山縣 勉

発行所 公益社団法人日本写真家協会(JPS)

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCIIビル303 電話 03(3265)7451(代表) FAX 03(3265)7460

印刷所 株式会社光邦

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3丁目11番18号 飯田橋 MKビル 電話 03(3265)0611(代表)

Canon

make it possible with canon

BRAND NEW SIX.

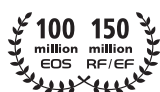


世界は新たな映像表現の可能性と出会う。

それは、新たなSIX。まだ誰も見たことのない世界へと導く、始まりのMark II。
撮り手の想像力に応え、追いかけて続けるトラッキングフルサイズ。映像表現の可能性
と出会う、EOS R システムの新時代へ。すべてを撮りに行こう。

NEW

トラッキング フルサイズ
EOS R6 Mark II



EOSは2019年9月に累計生産台数1億台^{※1}、交換レンズRF/EFレンズ
シリーズ^{※2}は2021年1月に累計生産本数1億5,000万本を達成しました。
※1 映像制作用シネマカメラを含む。 ※2 RFレンズ、EFレンズ、EF-Sレンズ、
EF-Mレンズ、EFシネマレンズ、エクステンダーを含む。2021年2月3日時点。



© キヤノン EOS R6 Mark II ホームページ

canon.jp/eos-r6mk2

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

TAMRON

Focus on the Future

35-150mm F/2-2.8 Di III VXD (Model A058)

ソニー Eマウント用

世界初*
大口径F2スタート、
ポートレートズーム、
誕生。



35-150_{mm} F2-2.8

for Sony full-frame mirrorless

(Model A058)

ソニー Eマウント用 Di III: ミラーレス一眼カメラ専用レンズ

*フルサイズミラーレス用ソニー Eマウントズームレンズにおいて。(2021年8月現在、タムロン調べ)

www.tamron.co.jp

製品の詳細情報はこちらから▶



PENTAX



一眼レフの未来を創る。

日本で初めて一眼レフをつくったペンタックス。

その哲学、技術、情熱のすべてを注ぎ込んで、この一台は誕生しました。

APS-Cフラッグシップモデル、PENTAX K-3 Mark III。

写真を撮ろう。

*K-3*III

株式会社リコー / リコーイメージング株式会社
お客様相談センター：0570-001313 (ナビダイヤル) www.ricoh-imaging.co.jp

RICOH
imagine. change.

セミナー研究会レポート

◆2022年度第2回技術研究会報告◆

「ミラーレスカメラ用交換レンズの 魅力に出会う」

2022年10月12日(水) 14:00～16:30

JCIIビル6階会議室、オンライン、参加数：32名

講師：(株)ケンコー・トキナー 田原栄一、(株)シグマ 桑山輝明、
(株)タムロン 安藤 稔、西角久美子

今回の技術研究会は2020年に開催した「最新ロケーションライティング事情」以来の撮影機材にスポットを当てた研究会となった。最近はプロ写真家がミラーレス一眼カメラを導入する例も増えたのだが、マウントコンバーターを使用すればとりあえず一眼レフ用レンズが使えてしまうことで、ミラーレスカメラ専用レンズに乗り換えることを躊躇しているように感じる。だが実際に使ってみるとミラーレスカメラ専用レンズの写りのすばらしさに驚かされる。この事実を多くの写真家に知っていただくため今回のテーマとした。

講師には(株)ケンコー・トキナー、(株)シグマ、(株)タムロンの3社を招き、交換レンズの技術解説と新製品の説明を行った。

この研究会ではカタログやネットの情報だけではわかりづらかったことが、深く理解できて有意義なものだった。



一眼レフ用レンズをコンバーターで使えたとしても、ミラーレス専用レンズとミラーレスカメラボディとの組み合わせで差や周辺光量の補正が容易となり、AFの精度も向上する。カメラのフランジバックが短くなったため、レンズの設計も自由度が上がり最短撮影距離が短縮し、フォーカスを変えても画角変化(ブリージング)が少ない製品も増えている。特に広角レンズでの画質改善が著しいので、高品質な作品を制作するために、また撮影時の創作活動をサポートするためにもミラーレス一眼カメラにはミラーレス用レンズの使用を勧めたい。

講演後の質疑応答は3社並んで同席する珍しい光景となった。専門的ではあったが会場の雰囲気は楽しいものだった。また会場内では3社の最新の交換レンズを自由に手に取って試せるブースが設けられた。

今回はJCIIビル6階会議室とZoom同時配信のハイブリット開催となり、技術研究会では初の試みとなった。映像、音声ともはっきり視聴することができたという報告があり、開催までに機材準備やテストを積み重ねた委員の苦勞が報われた。

(記/川村容一、撮影/藤田修平)

◆関西地区委員会オンラインセミナー報告◆

写真家のためのインボイス制度勉強会 ～インボイス制度について知る～

2022年10月17日(月) 18:00～20:00

オンライン 参加数：80名

講師：上西 知(税理士/Team創愛・上西会計事務所 所長)

テーマが令和5年(2023年)10月より導入されるインボイス制度ということもあり、従来の撮影や機材関係の勉強会と違うテーマであったが、事前申し込みには90名以上集まり関心の高さが伺われた。

セミナー講師には上西会計事務所



所長 上西知先生をお招きしてインボイス制度についてのお話をいただき、また写真家にとってこの制度とどう向き合っていけば良いのかを非常にわかりやすく話していただいた。

セミナー内容については写真家とはいえ、個人事業主または中小企業の経営者として普段撮影時に発揮している技術・経験・センスとはまた違った、経験と判断・センスが問われる時代が迫っていることを参加者は実感したのではないだろうか。特に、現在免税業者として申告している写真家が多いと見受けられるが、取引先企業からインボイス制度の登録番号の通知や消費税の取り扱い、また取引先からの優位的立場を利用された場合の公正取引委員会の判断例などかなり具体的な話を聞くことが出来た。取引先側の優位的立場を利用した圧力などを受けてインボイス制度に登録すると判断しても、消費税の取り扱いに「簡易課税方式」と「原則課税方式」の2種類がありどちらかを選択せねばならないが、免税業者であった写真家は簡易課税方式を選んだ方が多い方が多いのではないかとそれは写真家＝写真業は事業区分として第5種事業に入ること、第5種事業は50%のみなし仕入れ率で取り扱われることなど、具体的な例を話していただいた。この例だけでなく、個人個人のケースに当てはまるのかどうかは税理士に相談して進めていくことが必要である。

セミナー全体として浅く平たくなりがちなテーマであったが、事前に上西先生と関西地区委員会で入念に打ち合わせを重ねた結果、的を絞ったかなり具体的な内容の話が出来たと思う。質疑応答でも質問者はかなり具体例を挙げての質問になり、ここでも関心の高さが伺えた。1回のセミナーでは十分に伝えきれていないことが残念ではあるが、参加された会員には有益なセミナーになった。

(記/植村耕司、写真/オンライン画面)



Message Board



◆大石芳野 (1972 年入会)

『わたしの心のレンズ 現場の記憶を紡ぐ』

集英社インターナショナル新書

コロナ禍の3年間、みなさんはどう

されておられたでしょうか。私の撮影は話を聴きながらの対面が多く、了解が得られにくくなりました。毎日、悶々としていましたが、それでも初めのうちは長年の疲労を癒す機会だと思い、読書やDVD映画などでのんびりと過ごしましたが、気分は徐々に落ち込むばかり。やがて、自分の来し方を振り返りながら取材で出会った大勢の一人ひとりがおこめき出しました。ベトナム、カンボジア、アウシュビッツ、沖縄や広島、長崎、そしてパプア・ニューギニアなど、この半世紀に撮影を通しふれあった人びとが目の前に現れたように想い出され、その年の晩夏ころからは書かずにはいられませんでした。綴りながら、写真で伝える大切さを改めて噛みしめました。

(東京都武蔵野市在住)



◆おちあいまちこ (2015 年入会)

本書は、1991 年刊行の三浦綾子さんと写真家児島昭雄氏の共作『祈りの風景』に収められた48の祈りから31編が精選、再録されたものです。『祈りの風景』は児島昭雄氏 (1927-2017 元日本写真家協会会員) による大自らの生命の息吹や人々の日々の営みの写真に触発されて三浦綾子さんが書き上げた、神への感謝と感動のことばです。

今回はその中の31編の祈りにわたくしの草花や風景の画像を添えるという機会をいただきました。自身で画像を選ぶこととなり、数冊の三浦作品を読みなおしながらの作業となりました。昨秋、銀座の教文館で展示を行いました。

(東京都多摩市在住)



◆吉野 信 (1972 年入会)

『野生の輝き』

2022 年の7月から9月にかけての2ヶ月間、富山にある「ミューゼ福岡カメラ館」において、僕の写真展『野生の輝き』が開催された。150 枚のパネルが飾られ、大好評の写真展となったが、この年は僕がフリーの写真家になって50 年目の記念すべきイベントになったが、この写真展を記念して、岡山にある内外プロセスの協力により同名の写真集が刊行された。

あくまでも、写真展会場で販売する目的だったため、市販はされていないが、A4 版カラー 58 ページ、モノクロ 11 ページで、僕の活動の集大成ともいえる内容になっているので、機会があればみて楽しんでもらえたら幸いである。

(埼玉県入間市在住)



◆結解 学 (2004 年入会)

昨年 11 月に『東京の鉄道の謎を探る』(発行: 天夢人) を上梓いたしました。東京は日本の鉄道発祥の地でもあり、多くの列車が行きかう都市です。雄大な風景はありませんが、ビルの谷間を横切り、人家の軒を掠め、商店街の踏切を横切るなど意外な姿を見せてくれます。

本書では、市区別に歴史を捉えながら、街の鉄道の様子を撮影しています。取材は 2013 年頃から開始いたしましたが、1~2 年で街の様子がどんどん変わり、毎回新しい発見に驚きと楽しさを感じました。現在も被写体を求めて東京の街を歩く日が続いています。

(神奈川県相模原市在住)



◆山口一彦 (1994 年入会)

東京生まれであるが、故郷と言える場所は軽井沢と室蘭である。撮影することがライフワークになってい

る。しかし近年軽井沢は、森の伐採が進み自然が破壊されつつある。森の存在 (EXISTENCE) が失われていくことに残念な想いで、数年前から本格的に軽井沢の森をデジタルと銀塩 8 × 10、ローリーで撮影している。森へ入ると熊に注意の看板があるので、鈴を付け相棒愛犬チョコを連れ、機材を担ぎ散策するのが私の撮影スタイルである。

軽井沢の森は先代達が作り上げた優美な森である。カメラを通して記録し表現することが森林への意識につながることを信じて撮影している。そして後世に伝えていくことが大切ではないだろうか。(東京都北区在住)



◆今井しのぶ (2020 年入会)

スマートフォンで撮影をしたマクロの世界を子ども達に楽しんでもらう写真絵本。被写体は、りんごやクローバー等普段子ども達がよく目にする身近なもの。最初のページは6倍に拡大された被写体があり、「これ、なーんだ」のクイズ。次のページに答えが出てきます。クイズ形式になっており、親子で楽しめるので、プレゼントにも喜ばれます。マクロの世界の面白さを知り、興味を持ってくれる子ども達がいれば嬉しいです。夏休みに親子マクロ写真ワークショップを開催し、沢山の親子のコミュニケーションアイテムとして楽しんでいただきました。ワクワクした子ども達の笑顔が印象的で、幅広い世代で楽しんでいただける絵本となれば嬉しいです。(神奈川県川崎市在住)



◆池口英司 (2016 年入会)

イカロス出版から『超人! 奇人? 鉄道偉人伝』という単行本を上梓しました。小林一三、五島慶太、十河信二など、日本の鉄道建設に尽力した人たち 10 名を採り上げた評伝で

す。調べてゆくと、これらの大人物のほとんどが、人生の一時期に大変な逆境に身を置いている。五島慶太(東急電鉄の総帥)でさえ「この時は自殺を考えた」と綴っており、けれどもそれをバネにして偉業を成し遂げている。だからこそ偉人なのでしょう。それでは、今の自分はどうなのか? 順風満帆などにはほど遠いのは確かですが、でも毎日そこそこには幸せに生きているようにも思います。もう少し大人物になるために、もうちょっと苦勞するべきなのか? これも難しい問題です。

(神奈川県横浜市在住)

◆浅井秀美 (1993 年入会)

ライフワーク東京シリーズ第3弾

『東京・下町日和』(平成から令和へ)を、出版いたしました。平成12年の『東京・ある日ある時』(昭和から平成へ)、平成27年の『東京。愛犬日和』(平成の下町)も、見て頂けたら嬉しいです。仕事の無い、土日祝日に、東京下町を目的あるなしに関わらず、気の向くまま歩き、出会った人々と残したい情景にカメラを向け、35ミリ黒白フィルムで捉えた、スナップショットです。

下町を歩いていると、年々古い建物が壊され、新しい街並みに移行行くなかで、少しでも下町の良さ面影を記録に残しておきたいと思い撮り続け、私の思いを一冊にまとめてみました。

東京下町の素朴な人々の温もりと、現在の平和な日本を感じとって頂けたら幸いです。(東京都港区在住)

◆櫻井 寛 (1992 年入会)

日本の鉄道 路線と車両の大幅鑑『JR 編』の姉妹版『私鉄編』が出版されました。JR 編と私鉄編のページ数はほぼ一緒ですが、撮影が大変だったのは私鉄編です。なぜなら JR は旅客6社、貨物1社ですが、JR 以外の私鉄は206社もあるからです。

内訳は大手16社、準大手5社、公

営11社、中小133社、貨物鉄道9社、モノレール9社、新交通システム9社、鋼索鉄道14社です。大手には全長500kmを超える近鉄日本鉄道もあれば、中小には全長わずか2.2kmという千葉県芝山鉄道もあります。それほど私鉄の世界はバラエティに富んでいて撮影が大変だったわけですが、実際には、それはそれは楽しい仕事になりました。

(東京都稲城市在住)

◆山本皓一 (1975 年入会)

ロシアによるウクライナ侵攻や、それに呼応するような中国の台湾への圧力や北朝鮮の狂気じみたミサイルの連続発射など、不穏な動き。さらに安倍晋三元首相の銃撃暗殺事件をも含め、日本を取り巻く混沌とした情勢の昨今であります。

30年以上に渡って「日本人が行けない日本領土」をテーマに取材を続け、コロナ禍の中、改めて尖閣諸島や沖ノ鳥島などへ赴き、現場写真と共に、最新の国境事情を私自身、集大成の想いで出来上がった一冊がこの本であります。ライフワークのひとつとして「日本の国境」にこだわり続ける「決意と覚悟のようなもの」を感じていただけるとすれば、著者の幸いとするところであります。

(東京都板橋区在住)

◆都築雅人 (1996 年入会)

現代を走るくろがねの勇姿たち

『国内蒸気機関車の魅力』発行：天夢人、B5判P144、2750円(税込)
旧国鉄の蒸気機関車の引退後、半世紀近く経過しました。今も各地で蒸気機関車の走るその沿線風景が変わらず見ることができ私はその懐かしい風景を求め出



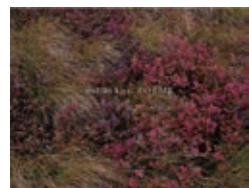
かけました。その土地に住む人々を写しこみ背後に蒸気機関車を入れる、これが私の撮影スタイルです。学生時代に撮影場所巡りをしながら40年ぶりに訪れる土地に立つのも楽しみになっています。

本著は国内で動態保存されている蒸気機関車を詳しくまとめ2022年9月に出版しました。

(東京都新宿区在住)

◆喜多規子 (2021 年入会)

2022年9月にOM SYSTEM GALLERY 東京にて開催した写真展「FORME (フォルム)」に合わせ、風景写真出版より2作目の写真集『FORME』を出版しました。自然はまさに偉大な芸術家であり、自然が織りなす造形美には常に驚かされます。気象条件によって生じる神々しい光の導き、厳しい自然の中で生



きた証が刻まれた樹木、冬の氷点下の中で創り出された氷の造形美、霜を纏った植物、悠久の時を経て創り出された曲線美など…自然と対峙する中で、このような森羅万象を私なりの感性と美意識で掬い取った作品から自然の摂理を少しでも感じていただけたら嬉しいです。

(東京都港区在住)

会報『メッセージボード』原稿募集

出版広報委員会では、随時、近況報告を募集しております。仕事の事や取り組んでいるテーマ、思っている事など『メッセージボード』の名が示すように伝言板的なもの、写真展の開催案内、写真集・出版物の案内、同好会の呼びかけなどでも構いません。

また、写真の添付も大歓迎ですので、気楽に寄稿いただければ幸いです。ただし「特定の個人や企業・団体に対する中傷誹謗内容は掲載しない」というスタンスで編集を行っております。

300字程度で何回ご登場いただいても結構ですので、以前ご執筆頂いた方も是非、ご投稿ください。

なお、郵送の添付写真は、返却しませんので予めご了承の程お願い申し上げます。メール投稿はinfo@jps.gr.jp でお待ちしております。

SIGMA

世界初・唯一無二*。
ミラーレス専用高倍率
超望遠ズーム、登場。

※ミラーレス専用交換レンズとして。2023年1月現在、SIGMA調べ

S Sports
60-600mm F4.5-6.3
DG DN OS

ミラーレス専用 | フルサイズ対応

希望小売価格(税込): 368,500円

ケース、フード(LH1144-02)、かぶせ式キャップ(LG-740E)、

ショルダーストラップ、三脚座(TS-121)組込み

対応マウント: Lマウント用、ソニー Eマウント用

*Lマウントはライカカメラ社の登録商標です。



シグマのプロダクト・ラインについては、こちらへ。

sigma-global.com

ヨドバシ・ドット・コム 映像制作機材 専門ストア開設しました



プロ機材を豊富に品揃え
ぜひご利用くださいませ



新規会員
募集中 日本写真家協会 会員様専用の
ゴールドポイントカード

12%ポイント還元

※現金・テビットでのお支払時。一部対象外商品ございます。



専門知識豊富な販売員が親切丁寧にご案内いたします!

ヨドバシカメラ

www.yodobashi.com

新宿西口本店

〒160-0023
新宿区西新宿1-11-1
☎ 03(3346)1010

マルチメディア 新宿東口

〒160-0022
新宿区新宿3-2-6-7
☎ 03(3356)1010

マルチメディア Akiba

〒101-0028
千代田区神田花岡町1-1
☎ 03(5209)1010

マルチメディア 錦糸町

〒130-8580(駅ビル)ミナ1-2-3
墨田区江東橋3-14-5
☎ 03(3632)1010

マルチメディア 上野

〒110-0005
台東区上野4-10-10
☎ 03(3837)1010

マルチメディア 町田

〒194-0013
町田市原町田1-1-11
☎ 042(721)1010

八王子店

〒192-0082
八王子市東町7-4
☎ 042(643)1010

マルチメディア 吉祥寺

〒180-0004
武蔵野市吉祥寺本町1-19-1
☎ 0422(29)1010

マルチメディア さいたま新都心駅前店

〒330-0843
さいたま市大宮区吉敷町4-263-6
☎ 048(645)1010

マルチメディア 川崎ルフロ

〒210-0024
川崎市川崎区日進町1-11
☎ 044(223)1010

アウトレット京急川崎

〒210-0007
川崎市川崎区駅前本町21-12
☎ 044(221)1010

マルチメディア 横浜

〒220-0004
横浜市西区北幸1-2-7
☎ 045(313)1010

マルチメディア 京急上大岡

〒233-0002(京急百貨店1-8-9階)
横浜市港南区上大岡西1-6-1
☎ 045(845)1010

千葉店

〒260-0015
千葉市中央区富士見2-3-1
☎ 043(224)1010

マルチメディア 新潟駅前店

〒950-0901
新潟市中央区弁天1-2-6
☎ 025(249)1010

マルチメディア 宇都宮

〒321-0964(トナリエ6-7-8階)
栃木県宇都宮市駅前通り1-4-6
☎ 028(616)1010

マルチメディア 甲府

〒400-0031
山梨県甲府市丸の内1-3-3
☎ 055(230)1010

マルチメディア 郡山

〒963-8002
福島県郡山市駅前1-16-7
☎ 024(931)1010

マルチメディア 仙台

〒983-0852
宮城県仙台市宮城野区榴岡1-2-13
☎ 022(295)1010

マルチメディア 札幌

〒060-0806
北海道札幌市北区北六条西5-1-22
☎ 011(707)1010

マルチメディア 名古屋松坂屋店

〒460-8430(松坂屋名古屋店南館4-5階)
愛知県名古屋市中区栄3-16-1
☎ 052(265)1010

マルチメディア 梅田

〒530-0011
大阪府大阪市北区大深町1-1
☎ 06(4802)1010

マルチメディア 京都

〒600-8216
京都府京都市下京区東塩小路町590-2
☎ 075(351)1010

マルチメディア 博多

〒812-0012
福岡県福岡市博多区博多駅中央街6-12
☎ 092(471)1010

ヨドバシカメラの インターネットショッピング

www.yodobashi.com
ケータイでいつでもどこでも簡単ショッピング!
<http://m.yodobashi.com>



ラノ・ララク ————— 小倉雄一郎

イースター島は海底火山の噴火でできた島で、このラノ・ララクも火山である。モアイの製造工場とも呼ばれ、連結火山灰や凝灰石で形成された山肌を削って作成している途中のモアイが、そのままの状態に残されている。約400体のモアイが点在し、中には火山湖付近にまで置かれている。大きいものでは20m以上、約400tあるものもあり、どのように移動させたのか空想を巡らすだけでもロマンを感じる場所である。

FUJIFILM GFX50S GF32-64mmF4 R LM WR





淡い春色に包まれる夜 ————— 吉永陽一

郡山といわきを結ぶ磐越東線は本数の少ないローカル路線である。春、沿線は桜色に染まる。郡山駅の次は舞木駅。桜で有名な無人駅だ。駅の桜は1939年の開業時に記念植樹したのが始まりで、無人化後の植樹事業によって、駅を包み込むほどまでとなった。2022年4月の夜。舞木駅はライトアップが見事で、十分に手持ち撮影できるほど。訪れた人々は、闇夜に淡く浮かび上がる桜を前にして、マスク姿越しの目が輝いていた。

FUJIFILM GFX100S GF45-100mmF4 R LM OIS WR





夜明け前の代々木公園 ————— 荒谷良一

「代々木公園」は明治神宮と隣り合わせた自然豊かで、都会のオアシスともいえる公園です。日中は老若男女を問わず多くの人々で賑わいますが、夜明け前に時として日常と非日常の狭間とも思える光景が現れる瞬間があります。私はその夢のような時を永遠のものになりたいという思いで写真を撮りました。霧が立ち込め幻想的な世界となり、微妙なトーンの光に包まれた世界をGFX100Sはラージフォーマットならではの描写力で表現してくれました。

FUJIFILM GFX100S GF100-200mmF5.6 R LM OIS WR



極限まで早く、軽やかに。
想像の先へ行く。



フォトグラファー | 田中雅美 MASAMI TANAKA

新開発の裏面照射積層センサー・高速画像処理エンジンを搭載
「Xシリーズ」史上最高の高速連写・AF・動画性能を実現するフラッグシップモデル

X-H2S

- 新開発の「X-Trans™ CMOS 5 HS」センサー・高速画像処理エンジン「X-Processor 5」を搭載
- 最速 40 コマ / 秒のブラックアウトフリー高速連写が可能
- 動物・鳥・車・バイク・自転車・飛行機・電車を AI で検出できる被写体検出 AF を搭載
- 6.2K/30P や 4K/120P 4:2:2 10bit での映像記録が可能





Photo Yokotsuka Makoto